なくて、學校を卒業した人などが多い。學校で邪見を增長さすことを敎へるわけではないが、たゞ智慧だけ附けると胡魔化すことを覺えてしまつて、どうしたら世間が胡魔化せるか、どうしたら自分の勝手な事がうまくやれるかと、さういふことばかり考へるやうになるのである。それだから信解圓通、卽ち信ずる力と解する力が一つになつて、そこで初めて善き行ひの根柢が出來るといふのである。

そこで信解圓通といふことは特に注意すべきである。圓といふのは完全に揃つて居ること、通といふのは解け合つて一つになることである。揃つただけではいけない。信と解と戰ひ合つては何にもならぬ。信仰の上からは斯うだけれども、理屈の上からいへば納得出來ないなどゝいふのは、信と解と戰つてゐるのである。揃つて一つにならなければ何にもならない。たゞ揃ふだけでは心細い。信解圓通といふことを理想としなければならぬ。斯ういふやうな會合でも出來るだけ信解圓通を圖りたい。吾々共のやることは碌なことは出來ませぬけれども、お經を讀むことは信を

養ふことで、私などがお話するのは解の方で、この解を養ふのに幾らか役に立つやうにと思つて居る。つまり信と解と融け合つて、佛樣は有難いと深く感ずると共に、なぜ有難いかといふことも能く分つて、愈々深く信じて行くといふやうに、信と解と一つになつて行くと行の根柢が立つのである。

一八、末世の信仰

此の信解圓通といふことが吾等の理想であるが、どつちからでも入つて行けば宜いのである。子供の時から佛樣を拜むといふ習慣がついて、信の方が相當に出來てゐる人は、これを解を以て補ふことに努むべきである。なぜ有難いかといふことが分らずにやつてゐると、いつの間にか離れてしまふ。そこで相當な年頃になれば之に解を與へなければならぬ。斯ういふ譯だから有難いのだと、信から入つた人に

は、正しい解を與へて、其の信を固めさせることに努めなければならぬ。吾々は解の方から入つた者である。彼此と本を讀んで、理屈を覺えて來たものであるから、信の力が足りない。それで私共のやうに哲學や科學や、いろ〳〵な所から宗教に入つて行つた者は、信を養ふといふことに大に努めなければならぬといつでも思つてゐる。信と解とが揃つて一つになる爲にはいろ〳〵努力しなければならぬ。斯ういふやうなお集りを願つて、私共のやうな詰らぬ話でもするといふのは、所謂解を養ふ爲であるが、決して解だけではなく、信を養ふ爲にはお經を讀むとか、いろいろな方法もしなければならぬ。理解だけを主にしても詰らぬけれども、理解はどうでも宜いといふのでも困るのである。

大變に話が脫線するが、正しい解を養ふといふことは、今後若い人を教育する上に於て非常に大切なことで、知らせないで良い人間を造らうと思つても決して出來ることではない。社會が複雜で、若い人は自然に社會からいろ〳〵なことを教へら

れる。活動も見せない、新聞も讀ませないで、さういふものは一切素通りせよといふやうなことばかりいつて居ても、いつの間にか新聞も讀んでゐるし活動も見てゐる。私の親しい家の子供が、今は大きくなつて居るが、まだ小さい時に其の兩親は餘り妙なものは讀ませないやうに注意して居たが、或る日『お父さん、サボタージュといふことは何のことです』といつて聞いた。親父はサボタージュなどゝいふ言葉は教へないのだけれども、學校の友達か何かに聞いて來たと見える。親父はこれは危ないと思つて、『サボタージュといふのは怠けることだよ。』といつて聞かせると、『西洋ぢやサボタージュが流行るさうですね』といふので、『イヤ、流行るといふ譯ぢやないが……』と曖昧な返事をしたのだが、斯ういふやうに家では教へないことを、世間で教へられて來る。自然に新聞や雜誌を讀むものだから、親が知らせまいと思ふ事を多く知つて居る。溫室の中で草や木を育てゝ、霜や雪を除けてゐるから大丈夫だらうと思つて、溫室を出して外の空氣に觸れさせると直ぐ枯れてしま

ふ。たゞ雪や霜を除けるばかりではいけない。雪や霜に堪へられるだけの榮養を與へてから出してやらなければならぬ。さういふ意味に於て、信と解と與へなければならぬのである。

私の親類に小さい男の子供があるが私が行くといろ〳〵の事を聞く。『おぢさん飛行機はどうして飛ぶのですか。』『飛行機はプロペラが廻るからさ。』『プロペラが廻れば どうして飛ぶのです。』『風が出るからさ。』『風が出ればどうして飛ぶのです。』『それは風が翼といふものに當るからさ。』『風が翼に當ればどうして飛ぶのです。』斯うなつて來ると此方も能くは分らないので、『それは風が吹くと紙鳶があがるのと同じことだ。其の位のことは自分で考へなければ駄目だ』といつて問答を打切つてしまふが、實は此方が能くは分らないのである。斯ういふやうな譯で、若い時は世間の事が一々皆珍しいので、後から〳〵疑問が起るのだから、その疑問を抑へ附けて置いて、たゞ信ぜしめやうとしてもなか〳〵出來ぬ。そこで信と解との兩方を養ふと

末法の世の爲の教

いふことが殊に肝要なのである。

世間は愈々複雜になり、疑ひの種は多くなるばかりであるから、唯だ有難い教へを說くといふだけでなく、どんな疑問を持つて來ても、其の疑問を解決し得るやうな根柢を有つた宗教でないと斯ういふ世の中の力とはならない。人間は何故生きてゐるのか、一切の物は何の爲に存するのかといふやうな疑問を持ち出された時に、其の疑問を抑へ附けて置いて、たゞ佛樣を信じろといつても到底駄目である。然るに釋尊は法華經のやうな深遠な教をお說きになつて、これが末法の世に於て、卽ち世の中が非常に複雜になり、人心が險惡になつた時に、初めて世の中にその價値を發揮すべきであると仰しやつたのは、洵に尤もな次第である。世の中が無事で、疑問を起す機會があまりないやうな時代ならば、一旦有難いと思へばそれを其の儘に信じてゐるけれども、今のやうな複雜な世の中では、どんな疑問を持つて來ても、之に正しく答へ得るやうな教義をもたぬ教は、教として成立たない。それを强ゐて成

立たせやうとすれば頭の單純な人ばかり集めて教へることになる。今でもさういふ宗教もある。それは所謂愚民を集めて教へることになるので、一切の人を教へやうとするには信解圓通といふことを旨とするものでなければならぬ。今の時代はどちらかといへば解の方を求むる人の方が多いので、理窟ばかりこねてゐるといつて憤慨する人もあるが、さう無暗に憤慨すべきものではない。社會が複雜になればいろ〳〵な疑問が起つて來るのである。一方に深く信ぜしむると共に、一方に正しく解せしむるといふことにも努めなければならぬ。『何だか知らないが南無妙法蓮華經』では通らない。殊に今の若い人はそれでは承知しない。

今の若い奴は生意氣だと憤慨して見ても仕樣がない。心の中に起つて來る疑問を抑へ附けて居る譯にはいかない。然るに吾々の知つてゐる所に依れば、法華經の教の如きは能く之を味つて行けば、如何なる疑問を解決し得られるやうな哲學的基礎が具はつてゐるのだから、吾々はこれを深く味つて、自分でも心に問題が起つたならば之に依つて解決し、又人から打突けられた如何なる問題でも、之に依つて解決し得るやうに心懸けるといふことが大切であると思ふ。先づ斯ういふ譯で、たゞ有難いと思ふだけでなく、信解を揃へなければならぬといふことを、私共が勝手に考へたのではなく、佛がいつてゐらつしやるのだから、深く此の事に注意すべきである。吾等は常に信解を養つて行つて、幾らか宛でも煩惱の生活を離れて行くやうにすることに力を盡すべきである。

一九、小乘と大乘

其の煩惱の生活を離れて行くのに、どういふ階段があるかといふと、先づ、今までのやうに道も教も辨まへないやうな生活は詰らないといふことを知つて、兎に角モウ少し深い意味のある生活がしたいといふ決心だけはついた程度のもの。これが

最初で、之を名けて須陀洹といふのである。之を漢譯すると『入流』といふ。佛の教を學ぶ者の仲間入が出來たといふ意味である。たゞの興味でも理屈でもない。兎に角眞面目に佛の教へを習つて、少しづゝでも其の學んだことを實行しやうといふだけの考への出來たもので、これが專門の語でいふと須陀洹である。

それから佛教を學んで、世間の事に執著せぬ心がほゞ出來る程度のが斯陀含で、譯して『一來』といふのである。一といふのは『どうかしたら』といふことで、來といふは元へ戻ることである。信心を勵んで全く淨らかな生活をしたいとは思つてゐるが、まだ元の凡夫に戻りさうな危險のあるものが卽ち一來で、實は私なども、どうかして元へ戻りさうで危險である。一生懸命にお經を讀んで、本當に有難いなとは思ふけれども、どうかすると旨い物を喰べたいとか、斯んな東京のやうな暑い所にゐても詰らないから溫泉にでも行きたいとか、いろ〳〵な安念が起つて來る。兎角煩惱の境涯に戻りさうで、煩惱から離れやうとは努めるが、煩惱から全く逃れきら

ない。是れが『一來』といふ境界である。

それからもう少し上になれば阿那含となるので、譯して『不來』といふ。決して元の凡夫に戻らないだけの見込みが附いたものである。モウ如何なる事があつても元に戻らない、淸淨な氣持で一生を送れるといふだけの覺悟は附いてゐる者である。ところが別に間違つたことをしないでゐても心の中に全く迷ひがなくなるといふのは容易なことではない。私なども子供の時分には喧嘩をして人の頭などを毆つたことがあるが、近頃では人の頭を毆つたことはない。しかし肚の中には毆りたいやうな氣が時々起る。人を突倒したいやうな氣も起る。墓口を開けて見て十二錢しかないなと思つてゐる時に、自動車が勢ひよく來ると、あそこの角でひつくり返つて見たら痛快だらうなといふ氣持になる。兎角肚の中と外に現はれた行ひとが一致しない。それだから非難されぬだけの行ひが出來ても本當に安心といふ譯には行かない。習氣といふものが殘つて居る。習慣となつてゐる所の氣分が除き盡されぬの

である。舍利弗といふ人は釋尊のお弟子の中でも有力な人だが、この人は以前に非常に氣の短い人であつた。それで釋尊の有力なるお弟子になつた後でも、腹を立てさうな習氣が殘つて居りますといふことを申して懺悔してゐる。吾々も成るべく腹を立てないやうな心掛けでは居るが、やはり習氣が殘つてゐる。人に足を踏まれると、『馬鹿野郎、氣を附けろ』と怒鳴りたい所を、馬鹿野郎の『ば』の字位で喰ひ止めてしまふが、習氣が大いに殘つてゐる。

此の習氣も無くなつて、全く世の中を離れた淨らかな生活に入れば、所謂阿羅漢となつたので、これは『殺賊』と譯すのである。賊とは卽ち迷ひで、心の迷ひを殺し盡した者である。迷ひといふのは要するに小さい自己を中心にして、物事を考へる所から起るのである。それを全くなくしたものは本當に清淨な生活に入れるので、卽ちそれが阿羅漢である。

之を小乘の四果といふので、果とは卽ち修行を積んだ結果である。これだけ修行

大乘に入る道

が出來ればもう世の中の累ひを受けないで濟むだけにはなれるが、前にも申したやうに、人は共に生きて行くべきものであるから、自分一人が淨らかな行をして、世間の迷つて居る者を、冷い眼を以て見るといふことでは、人生といふもの〻意義がない。それで此處まで來てからもう一度出直さなければならぬ。自分一人として淨らかな生活が出來ても、世の中を見ると皆互ひに爭ひ鬪ひあつて、實に淺間しい生活をしてゐる。さういふものを何とかして其の淺ましい生活の中から救ひ出してやりたいといふ心持が起らなければならぬ。それで初めて自分も佛樣のやうな、洪大な智慧と大慈悲の心とを具へ得るやうに、自分を修養して行かなければならないといふ決心がつくので、さう思ひ定めると共に、吾々は菩薩の修行を始めるのである。

菩薩の修行といふは佛の御心持を自分の心持とする爲の修行であるから、以上の四種の者よりも更に一段上のものである。吾々が經を讀むのも、佛を拜むのも、こ

れ皆菩薩としての修行をするに外ならぬのである。毎朝本堂で讀む經には、始めから終ひまで、自分一人助かつたら宜いといふやうなことは一つもいつてない。どうか信心した此の力を人に及ぼし、人々を同じ道に入れたい、世の中を意義のあるものにしたいといふことばかりいつてある。いつも多くの人と共に生きて、自分も本當に累ひのない生活に入らう、他の人をも同じ道に入れやうと斯う思はなければならぬ。是れが卽ち菩薩の心である。本當の菩薩の行を敎へたものが大乘の敎典であつて、その中で最も勝れたものが卽ち法華經だといはれて居る。それだから法華經を讀んでゐるといふことは菩薩としての修行を積むといふことだといはなければならぬのである。

菩薩の菩といふのは『菩提』を略したもので、薩といふのは『薩埵』を略したものである。詳しくいへば『菩提薩埵』といふのであるが、あまり長過ぎるから略して菩薩といふのである。昔から言葉の長いのは半分にするのが久しい間の習慣で、

この頃でも世の中が忙がしくなつたものだから、青年訓練所を『青訓』といひ、大阪朝日新聞や、大阪毎日新聞を『大朝』『大毎』といひ、モダンボーイを『モボ』といふが、それと同じやうなものである。

そこで菩提とはどういふことかといふと、『覺る』といふことである。或は智慧と譯したり、或は道と譯したりするが、直譯すれば『覺る』といふことである。次に薩埵といふのは生命のあるもの、卽ち人間のことである。菩薩といふと特別の人のやうであるけれども、やさしい言葉に譯せば『覺る人』である。覺つてしまへば佛樣であるが、これは『覺つて行く人』なのである。覺といつても、自分一人覺つたのみでは本當の覺とはいへない。前にもいつた自覺と覺他で、自分も覺り他人にも覺らせるといふ兩方を含まなければならぬ。そのことに努めるのが卽ち菩薩である。吾々がここで佛樣を拜んでいろ〳〵の事を語りあつて居るのも、菩薩の行をして居るものなので、卽ち覺つて行く爲の修行なのである。なか〳〵本當に覺りはし

ない、迷ひだらけなのだけれども、覺りたいと思つてゐる。又人をも覺らしめたいと思つてゐる。此の心持で修行するのが卽ち菩薩の行で、自分が菩薩だと思へば、少し位の暑さなどは餘り感じないやうになれる。觀世音菩薩とか普賢菩薩とかいつても、向ふも菩薩だが此方も菩薩なので、恐ろしいことも何もない。但し段がちがふ。例へば京都行の汽車に乘つたとしたら。向ふ樣は東海道のズツト先に行つてゐるのに、こちらは漸く品川を出たといふくらゐの事で、全く段違ひである。それで何だか吾々が菩薩といふのは濟まないやうな氣がする。併し經典の中には旨いことがいつてある。修行をし始めた菩薩を『新發意菩薩』といつてある。卽ち新しく思ひ附いた菩薩で、菩薩の見習ひといふやうな譯である。しかし菩薩の見習ひの積りでゐる方が宜い。獨りで覺つて、己れを潔くして終るといふことではならない。宗敎の本義として人間の生命は此の世で終るものでないといふことを信ずるならば、この世の一生涯では新發意菩薩で終つても、此の修行が後の世まで續きさへす

れば宜いのである。見習ひでも試補でも何でも宜しい。唯だ此の修行が永く續くことが大切で、後に生命があるからといつて安心して居てはならぬ。

又『菩薩摩訶薩』といふことが經典の中に始終出て來るが、菩薩が皆な摩訶薩なのか、菩薩の中で殊に勝れたものを摩訶薩といふのか。此の事に就てよく考へて見ると、菩薩と摩訶薩と二種あるのではなくて、菩薩は摩訶薩だといふことに解すべきである。摩訶といふのは『大きい』といふこと。薩は薩埵の意味であるから、摩訶薩は『大きい人』といふことになる。なぜ大きい人かといへば、佛になるといふことを理想として修行する者であるから、是れは大きい人に違ひない。たとひ今は詰らぬ者であつても、自ら覺ると共に人を覺らせ、佛の大慈悲の御心持を以て自分の心持として行かうといふのであるから是れは大きい人で、更に委しくいへば『大心の人』である。卽ち金を儲けやうとか、地位を得やうとか、名譽を得やうとかいふのではなく、世の人を救ふ力を具へやうと思つて大乘の修行をしてゐるのだから、

これ程大きい人はない。これが卽ち摩訶薩である。

そこで之を『大士』と譯してある。これは婦人の方には少しお氣の毒であるが、昔は男のみが表面に立つたから男をして女をも代表せしめてゐるので、これを大人といはず大士といつてある。士とは男のことであるけれども女を含むので、男が女をも代表して居るのである。日蓮上人のことを日蓮大士といひ、觀音樣のことを觀世音菩薩といはないで觀世音大士とかいてある例も多くある。吾々は洵に力のない者であるけれども、心持だけは所謂大士の心持でなければならぬ。佛樣と同じ者になるまでは、決して努力を止めまいと斯う思ひ詰めて居なければならぬ。少しばかり分つたといつて、分つたと思つてはならぬ。佛となり得る境界に近づくまでは油斷をせまいと、自ら心に誓はなければならぬ。それが卽ち摩訶薩の心持である。

佛と同じになるまでは、言ひ換へれば完全なものになるまでは努力を緩めまいと

いふ決心、これが所謂精進である。精とは『混りのない』といふこと、進とは『進んで止まない』といふこと。たゞ進むといふのではない、途中で立ち止つてしまはぬやうにしなければならぬ。何等混りのない心持で進んで止まないといふ、是れが所謂精進である。大乘の修業をする者は此の事をいつでも心掛けて居なければならぬ。宗教上の修行ばかりではない、何の業でも是れで儲けやうとか、これで世間の人に褒められやうとか、そんな混つた心持をスツカリ捨てゝ進まなければ妙所には達せられぬ。また人間は進まなければ必ず退くものである。進歩が止まれば其の時から退歩が始まる。その退歩が目立たないから、同じことだと思つて居るが、よく考へて見ると同じ狀態でゐるものではない。幾らか宛でも進まなければならぬ。進むのが止つたらその瞬間から後戻りする。上手になるのが止まつてしまへば、その時から下手になつて行く。吾々もそろ〳〵所謂老耄する年であるが、進歩しないと老耄するのであるから、氣を附けなければならぬと思ふ。私は日下部鳴鶴先生とい

ふ書家を知つて居たが、青山の先生のお宅に朝早くお訊ねすると、暫くお待ち下さいといふので三十分間程も待たしてから出て來られる。さうして『いやどうも失禮しました。手習をしてゐたものですから……』といはれる。もう先生も七十歳にもなつた頃であつたが、その先生が毎日手習ひをされるので、手習ひをしなければ下手になるといはれる。私は實に恐れ入つた。流石に日本に幾人といはれた書家になる位の人は異ふなと思つた。その通りで、習はなければ下手になる。進歩しなければ退歩する。佛樣になつてしまへば後戻りすることはないけれども、佛樣にならない間は進歩しなければ退歩するといふ心持で、飽くまで精進を忘れてはならないのである。

大體斯ういふやうなわけで、所謂大乘の修業をするといふことは己れを完ふする道である、また世の中を良くする道である。本當に人間として生き甲斐のある一生を送る土臺になるのである。こんな心持で、吾々も力は及ばぬけれども大乘の修行

をしてゐる譯である。

二〇、妙法蓮華經

佛性の開發

吾々には佛となるべき本來の性質がある。卽ち佛性が具はつてゐるといふことは前にも簡單ながら申上げた。その佛性を段々養つて大きくする爲には、どうしても敎へを學ばなければならぬといふのは當然のことである。それは『一切衆生悉く佛性あり』といふことを佛も仰しやつた。また吾々自分で考へて見ても、常に利害得失にばかり囚はれてゐるのでもない。利害得失を離れて、一切の人の喜びを共に喜び、一切の人の憂ひを共に憂へるといふ心はあるらしく思へるが、何分にも世の中が複雜であつて、吾々の所謂煩惱を成長せしむべき出來事が絶えず起つて來るので、ウツカリしてゐれば、さういふ刺戟にのみ心が惹かれて、折角持つてゐる所の

佛性を發揮せずして終る。そこで絶えず教へを求めるといふ心掛けでなければならない。併しながらこの教へを求めて、少しばかり分つて來ると、大に分つたやうな氣分になる。そこで落付いてしまつたら、もう此より進んで教へを求めるといふことは出來なくなるのであるから、此の自ら足れりとする氣分を打破つて行かなければならない。それで今讀んだ法華經の本文の中にも此のことが始終言つてある。著を離れなければならぬといふことを言つてある。著とは卽ち執著で、吾々にはどうも執著がある。執著といふと、何か金が欲しいとか、地位が欲しいとか、勢力が欲しいとかいふ望みばかりを謂ふかのやうに思はれるけれども、決してさうではない。有らゆるものにつかまつて離れないのが皆執著である。それだから金にも執著があり、地位や勢力についても執著があり、悟りについても執著がある。『もう自分は悟つたから、世間の奴とは異ふぞ』といふ心を起せば、その悟つたといふことに執著するから、それより先へは進まれない。人を救つたといふことは宜いが、その救つ

たといふことに執著がある。さうすると『自分は人を救つた、』彼は自分に救はれた』といふ別を立てゝ、その救つたといふ所に止つてしまつて、それより以上には善い事をせぬやうになる。佛が此の著を離れさせる爲に教へを說かれるといふのは、非常に意味が深いことである。佛となるまでは中途で止つてはならぬ。佛となれば絕對の覺を得たのであるから、後へ戻る恐れはないが、佛の境界に到達するまでは途中で一歩も止つてはならぬ。善いことをしたと思ふことそれ自體が既に著であつて、それに止つてしまひ易い。それで今讀んだ法華經の本文にも著を離れる教へが說いてある。著を離れ切つたのが佛の絕對の境界で、そこへ落付く途中で止つたのでは、何處で止つても皆執著を免かれない譯である。所謂大乘といふことの本當の精神をよく考へなければならぬ。

大乘と小乘の區別を便宜的には種々に說くけれども、本當に言へば、菩薩の行を勵んで、佛になるまで中途に止まらぬといふ心持が所謂大乘心といふもので、それが

少しでも弛むと、折角悟つても悟つたかひが無くて終るのである。たとへ人に惠んでも、『惠んだ』と思つて聊かでも得意を感ずれば、その惠んだ功德はなくなつてしまふ。なぜならば、『惠んだ』と思ふと、惠まれた人が始終禮を言つてゐなければ不愉快である。それが出來ないと惠んだことが憤慨の種となり、色々な煩惱を起す因となるから、惠んだ甲斐がないのである。實際此の著を離れるといふことは難かしいことであるが、そこを一生懸命に努めなければならぬ。之を川を渡るに譬へると、こちらの岸から船出して、此の船が向ふの岸に著くまで途中で止つては不可ない。一間出て止つたのも、二間出て止つたのも岸を距る一間手前で止つたのも、止つたことに變りはない。つまり向ふの岸に着き得ないといふ點に於ては同じである。少し先へ行つて止つたから、早く止つたのよりも偉いとは言へない。向ふの岸へ着くのが目的であるから、着かないうちは何處へ止つても同じことである。だから吾吾は何としても著を離れなければならぬのである。

小乘と大乘の根本的區別

こちらの岸は迷ひの境界、向ふの岸は悟つた境界である。眞に悟つたといふのは佛樣より外にない譯であるが、迷つた者は結局向ふの岸に到達しなければならない。ところが、こちらの迷つた岸から向ふの岸に到達するのには、吾々が獨りで坐つて幾ら考へても駄目である。教へを學ぶより外はない。即ち佛の教へは吾々を乘せて向ふの岸に到達せしむべき船のやうなものであるから、それで佛の教へを『乘』といふので、その乘の中に大乘と小乘の區別が出來て來る譯である。教へといふ船に乘らなければ、吾々は向ふの岸に着く譯に行かない。その教への中に低いのもあり高いのもある。それで小乘と大乘といふ區別を立てるのであるが、併し小乘と大乘の區別は非常に難かしいことで、なか〳〵輕々しくは立たぬものである。

まづ便宜的には、誰でも自分の迷ひを除くことを教へるのが小乘で、一切の人の迷ひを救ふべき道を示すのが大乘だと、斯う言つて濟ましてゐるが、よく考へて見ると、さういふ區別だけでは濟まない。何故ならば、自分の迷ひを除き盡し得た

なら、自然に人を救ふことが出來る筈である。人を教へることは口で說くばかりではない、其の人の顏つき目つき、手つき足つきまで一切が人の教へとなるわけである。何も言はずに、默つて坐つてゐても、其の心に迷ひがなくなつたら、その人は絕えず周圍の人々を敎へてゐるわけである。特に敎へようとは思はないでも、敎へてゐるのである。されば自分の迷ひを除くのが小乘で、一切の人を敎へるのが大乘だといふ區別は、一寸納得が出來さうな區別だが、よく考へて見るとそれでは徹底的の區別にはならぬ。また一切の人を救ふのが大乘だといつて見ても、自分が迷つてゐて人の救へる譯がない。敎へを說くのでも、間違ひだらけの敎へを說けば人を迷はすばかりである。だから人を救はうとすれば、どうしても自身を完全にしなければならないことになる。自分を完全にするといふ事と、人を敎へるといふ事は畢竟同じものである。自分を完全にしさへすれば、自ら人を敎へられる。敎へようとしないでも、自分の言ふこと爲すことが皆敎へになる。また人を敎へることを目

的とすれば、自分の行ひを宜い加減にして置く譯に行かない。自分の爲とか人の爲とかいふ區別は立たない。便宜的には立つであらうが、斯ういふことで徹底的に大乘と小乘の區別は立てられない。

それなら結局どこで分けるかといへば、結局は佛になるまで菩薩の行を怠るまいといふ志をシツカリと立てさせる敎へが卽ち大乘の敎へであるといふより外はない。佛になることを目標としての修業を敎へたものが卽ち大乘の敎へだといふことになる。それより外にどうも本當の區別は立ちさうもない。そこで少し亂暴なことを言ふやうであるが、法華經は大乘の經典であつて、大乘の中でも特に尊い敎へであるといふけれども、假令法華經を讀誦しても、僅かにその一部分を解し得たに過ぎずして心驕り、もう自分は悟つたと思ふならば、その人は法華經を讀誦しながら、小乘的の心になつて居る者といはなければならぬ。私共もその一人かも知れぬが、世にはさういふ人が多い。大乘の經典を讀誦して居ながら、腹の中は迷ひだらけで

行懸りを捨て得ぬ

あつて、それで自ら足れりとして居るやうでは、大乘だの菩薩だのといへた譯のものではない。どうしてもシツカリと志を立てなければならぬ。

併しながら、お前達は皆貴い佛性を具へてゐるから、その佛性を充分に養つて大きくして、佛の境界に到達するまでは怠けるな、後へ退るなといふやうなことを初めから說かれても、なか〳〵多勢の人は納得しない。何故ならば餘りに人間は執著が强過ぎるからである。執著といふのは俗な言葉でいへば、行懸りに囚はれることである。どうしても凡夫は行懸りを捨てることが出來ない。『何れそのうち……』といふ事になる。吾々でも每日斯ういふことばかりして居てはならぬ。まだ斯ういふことをしなければならぬといふことはよく知つてゐる。併しサア今からやるかといへば、なか〳〵直ぐにはやらない。例へば早起きなどでも、夏は早起きすれば宜いに違ひないけれども、今月はモウ二三日で終りだから來月からやらう、など〵いつて居るから、いつ迄もやれない。兎角舊い習慣をすてられぬのは皆執著である。支

那の孟子が面白いことを言つてゐる。孟子が梁の惠王に王道を說いて、『今の政治の執り方は覇道である、王道でやらなければならぬ』と言つた。すると惠王が非常に感服して、『貴君の言ふ通りだ。併し今までの習慣があるから、今日からといふわけには行かない。段々に改革して行かう』と申された時に、孟子は笑つて、『そんな事ではならぬ。例へばあなたの御家來に每日隣りの家の鷄を十羽づゝ盜む者があつた時、あなたは必ず之を禁ずるであらう。その時にその人が、それは盜まないのが宜いことは分つてゐるけれども、今まで每日十羽盜んだのだから急に止めることは難かしい。それで明日は九羽、明後日は八羽といふやうにして、段々に止めて行かうと言つたら、それをお許しになりますか。盜むことが惡いと思つたら、その日から止めなければならぬ。王道が良いと思つたら今日から行はなければならぬ。何れその內にやらうといふのでは、出來るものではない』といつて居る。是れは如何にも尤もな說であるが、併しなか〳〵それが出來ない。今の泥棒の一羽づゝ減らして

行くといふ話を聽くとお笑ひになるけれども、吾々はお互ひに始終さういふことをやつてゐる。急には行かない、少しづゝやらうといつて居るから、詰り何も出來ないことになる。

併し吾々凡夫は兎角久しい習慣に執著して、急には奮發心の起らぬものである。釋尊は佛の智慧を以て吾々の心の底を照見せられて、吾々が斯ういふ未練な心を持つて居るものだといふことを御承知になつて、折角貴い佛性を具へて居ながら、いつ迄も凡夫の境界を脱し得ぬのを如何にも氣の毒に御感じになつたのである。そこで是れは段々に訓練して行くより外はないと思ひ定められた。譬へば足の弱い者に早く歩けといつても歩けるものではないが、段々に歩くのに馴れさせれば、早く歩けるやうにもなれるのである。釋尊は斯う思召されて、先づ吾々の實行し易いやうな事から說かれて、次第に深入りして行かれたのである。それが所謂『方便を說く』といふことで、無量義經の中には、

諸の衆生の性欲不同なることを知れり。性欲不同なれば種々に法を說きに

き。四十餘年には未だ眞實を顯はさず。

とある。方便を說かれるといふことは洪大無邊なる佛の慈悲心に出るものである。どうかして一切衆生をして皆佛の境界に到達せしめたいといふ御心から、樣々な方便を說かれたのである。譬へば金を含んだ礦石を分析して純金を得るまでには隨分多くの手數を經なければならぬが、確かに此の礦石に金が含有されてあることが分つて居れば、どんなに手數が掛つても更に厭ふべきではない。釋尊が四十餘年の間方便の敎へを說かれたのもそれと同じことである。釋尊は如何なる者でも佛と成るべき本性を具へて居るといふことを見極めて居られたから、それで少しも苦勞を厭はれないで、種々の方便の敎へを說かれたのである。此の事は法華經の中にスツカリ打明けて仰せられてある。それ故に法華經は釋尊御一代の說法の結論に當るものと考へられて居るのである。

今日は御一緒に法華經の壽量品を讀んだが、此の壽量品には釋尊の御心が特に明かに示されてある。此の偈の終りのところに至つて、

我常に衆生の道を行じ道を行ぜざるを知つて、應に度すべき所に隨ひて、爲に種種の法を說く。毎に自ら是の念を作さく、何を以て衆生をして無上道に入り、速かに佛身を成ずることを得しめんと。

とある。佛身を成ずるといふのは佛の境涯に到達することで、『常に』といふのは釋尊が教へを說き始められた時から、最後まで少しも變らぬことである。釋尊は終始一貫して、一切の人を共に佛の境界に到達せしむることを目的として教へを說いたのだといふことを言つて居られるのである。若し聽く人の力が足りなければ、目の前の小さい問題から教へ初めるけれども、どんな人に教へを說く時でも、これはつまらない人間だから此の位のところで止めて置かうとは思はない。今は愚かな者であり、或は惡人であつても、この人々もよく教へ導いて行けば、結局は一人殘らず佛心を成就するであらうから、どうぞ惡人も愚かな者も悉く佛の境界に到達するやうにしてやりたいと思つて、教へを說いて來られたのだといふのである。此の御心持をスツカリ打明けられたのが法華經であるから、法華經を眞實の教へといふのである。つまり佛樣の御本心をスツカリ打明けて、何の爲に教へを說くかといふことを明かされたものであるから、これこそ眞實の教へである。初めから何故打明けなかつたかといふと、初めからそんなことを言つても、迷ひの多い者は全く寄り付かないから、低い所から行つて、嘘ついては不可ない、泥棒しては不可ないといふやうなことから初めて、結局は法華經を說かれた。その時に初めて誰でも皆佛にしてやらうといふ御心持であつたのだといふことが分つて、佛樣の廣大なる慈悲心といふものに皆感激したわけである。

方便の教へといふことは、眞實を現はし盡さないといふ意味である。方便と眞實とが全く別なものではない。そこを法華を信ずると稱する人が時々取違へる。あれ

は方便の教へだから詰らぬ、これは眞實の教へだから法華經だけが尊いといふ。併し方便といふことは詰り眞實に通ずる途なのだから、方便の教へのそれ〴〵に價値もあれば力もある。また方便の教へを說かれて居る間でも、佛は一切の人を佛にしてやらうといふ御心を常に持つて居られたのである。それだから眞實の教へを讀んで、――法華經を讀んでから、もう一遍他の經典を讀み直して見れば、どの經の中にも佛の大慈悲の現はれて居ないものはない。どの教へを讀んでも、眞に心を打込んで讀めば、こゝで止りたいといふ心は起らぬ。モツト進んで行きたいといふ心持が必ず起つて來る。その心持が起つて來ないのは、本當に力を打込んで居ないからである。

それで釋尊のお弟子が段々說法を聞いて、さて法華經を說かれるのを聞いた時に非常に喜んで、あゝ實に有難いことである。自分達は段々と菩薩の修業をして佛になれる者だといふことがよく分つた。斯う分つて見ると、今までの修業が皆生きて

來て、一つも無駄ではなかつたといふことを御禮を申上げて居る。卽ち法華經の信解品に、迦葉が多くの人々を代表して說いた偈の中に、

我等今者眞に是れ聲聞なり、佛道の聲を以て一切をして聞かしむべし。

とある。聲聞といふのは佛の教へを聞いて世間の無常を觀じ、世間の何物にも執著しまいといふ決心をしたものであるから、菩薩よりも低いものであるが、今より菩薩の行を積んで佛にならうといふ志を立てた時、あゝ聲聞だつたのが有難いといつて御禮を言つてゐる。成程さもあるべき事である。梯子の段々を踏んで二階まで行つた時、その梯子の一段二段を踏んで來たことが非常に有難い。あれを踏んで來なければ此處まで來られなかつた。と思ふから有難いのである。吾々は高い程度の教へを聞けば聞く程、低い初步の教へを聞いたことが有難いと分る。低い方ばかり習つてゐたのでは、その有難さが本當には分らない。阿含經は小乘の教へだと言はれてゐるけれども、法華經などを讀んでから阿含經を讀んで見れば非常に有難

い。斯ういふ所から段々に多勢の人を導いて、佛になるといふ決心をする迄にして下すつたのかと感じた時に、低い方の教へが決して低い所に止つてゐないといふことを感じて、非常に有難さを覺えるのである。

斯ういふやうな譯で、先づ大乘と小乘、方便と眞實の區別を一通り明かにしたのであるが、こゝで更に考へて見なければならぬことがある。幾ら佛がそれ程尊い教へをお說き下さつても、その教へが吾々の心に應へなければ何にもならないことである。それだから佛の尊い教へを聞いて、それが段々分つて來て、結局は菩薩の修業を積み、最後には佛の境界にも到達することが出來るものであることを知り得たに就ては、佛の教へも有難いが、自分達がさういふことを知り得る性質を具へてゐるといふことがまた何より有難いのである。卽ち佛性といふ、佛になり得べき性質を自分達が持つてゐることが非常に有難い。若し斯ういふ性質がなかつたならば、幾ら釋尊が善い教へを說かれても、空說法になつてしまふであらう。吾々は釋尊が

善い教へを與へて下すつたことに心から感謝しなければならないと共に、其の教へを承はるやうな心を持つてゐるといふことについても、亦心から感謝しなければならぬ。

二一、本佛の實在

そこで問題が起る。どうして釋尊といふものがこの世の中に出て來られたらう。又どうして自分達に斯ういふ性質が具はつてゐるのだらう。實にこれは有難いが不思議なことだと、そこに氣がつく譯である。尙ほもう少し進んでいふと、吾々がこの世の中に生きてゐるといふことについて、感謝しなければならぬ筈である。吾々は命なくしてこんな尊い教へは聞けない。また命があつても、吾々人間と吾々の周圍のものが全く異つた性質であつたならば、吾々は此處に生きてゐられないわけで

ある。此處に生きてゐて教へを聞くことなどは出來ない譯である。吾々は地面の上に立つて生きてゐる。青空の下に立つて生きてゐる。草だの木だの山だの川だのといふ有らゆる物を相手に生きてゐるのであるが、若し吾々の性質と吾々を包んでゐる自然界の多くの物の性質が根本に於て異つてゐたら、吾々は一分も一刹那も此處に身を安んじてゐることが出來ないであらう。譬へていへば、火と水とは性質が異ふから、水の中に火を入れゝば消えてしまふ。一分でも一秒でも水の中に赤い火がその儘でゐることは出來ない。今吾々が此處に身を安んじてゐられるといふのは、吾々を圍んでゐる自然界といふものが、何かの點に於て吾々と共通な性質を持つてゐる。相通じて一つになる性質を持つてゐるからこそ、吾々は斯うやつてゐられるのだと思ふ。さうすると、吾々は佛樣に感謝し、また自分の佛性に感謝しなければならぬと同時に、吾々を圍んでゐる自然が吾々を此處に住まして置いて呉れるといふことにも心から感謝しなければならぬことになる。そこまで考へなければならない。

そこで根本の問題が考へられて來る。どうして釋尊のやうな方が出られたらう。どうして自分にこんな貴い佛性が具はつて居るのだらう。又どうして吾々が天地の間に斯の如く安んじて身を置いて、佛の教へを學ぶことが出來るのだらう。この問題を解決する最後の答へは、要するに一切の物が一つの偉大なる力に包まれてゐるからではなからうかといふことである。一つの大きな力が根本にある。その一つの大きい根本の力があればこそ、その大きな力の中に天地もあり、山川草木もあり、吾々も亦其等と共に住んで居る。而も吾々はこの尊い教へを聞いて解し得る心を持つてゐる。それを吾々は知らないでゐる。知らないでゐるのは氣の毒な事だから、そこで釋尊のやうな人が出て來て、吾々の本性を呼び覺ます爲に教へをお說き下さるといふことになるのである。その根本の一切の物を護り、一切の物の存在の根柢となつてゐるものを吾々は佛と考へ、それを本佛といふ言葉で言ひ現はしてゐる。壽量品に『如來秘密神通の力』とあるのがそれに當るのである。

勿論誰でも眞面目に坐り直して考へれば、何か根本に一つの大きな力があるといふことには氣がつく。それを人によつて色々に言つてゐる。或はこれを神と呼ぶ者もあるし、支那人のやうに天と呼ぶ者もあるし、哲學者に言はせれば原理とか原則とか第一原理とか其の呼び方はちがふけれども、何か一つのものが根本になければ、色色なものが斯う調和的に互ひに援け合つて居られる譯がない。どうしても眞面目に考へた時に、此の一つのものが認められるのである。それを眞面目に考へない人は、宜い加減に考へて、之を運と言つてゐる。幾ら宜い加減に世の中を渡つても運といふことだけは考へる。宗教も哲學も構はないで、唯だ行當りばつたりに毎日を送つてゐる人は、この力を運といふ。例へば途中で雨に降られた、これは運が悪い。降りさうだつたけれども降られないで歸つて來た、これは運が好い。商賣が儲かつた、これは運が好い。損すれば運が悪いといふ。人間の豫想しないことが起つて來ると、その根本を何も考へない人は運といふことで一切を決めてしまふ。併

し運といふことで決められない人は更に深入りして行つて、それを天と解釋したり、神と解釋したり、或は第一原理とか原則とかいふ。

また科學に於ては御承知のやうに、本體論をしないで、現象界のことだけを論じてゐるから、凡ての現象の根本となるものを、エネルギーといふことで解釋してゐる。要するに一つのものを方々から見てゐるのである。人間が眞面目に考へたら、そこに必ず何か一つのものがあるといふことに思ひ到るに相違ないので、或る人はこれを神といひ、或る人は天といひ、イギリスのスペンサーなどは思つた通りを正直に、アンノエブル（不可知）と言うてゐる。名をつけられない、知るべからざるものといふので、何か一つのものがあるとは思ふが、それは自分達の經驗では說明出來ない。それだからアンノエブルと言つてゐる。

一體吾々の心には種々の働きがあるが、その中で殆んど中心を爲すものは理智である、智慧である。此の智慧だけで一つのものを考へれば、實在といつても、本體

といつても宜いけれども、併し人間は理智だけで生きて居るのではない。感情もあり意思もある。そこで此の一つの根本的なものを考へた時に、これを敬ふ心持が起り、讃嘆する心持が起り、また之に頼りたいやうな心持が起る。この敬するとか、尊ぶとかいふ心持と、さういふ一つのものが存在することをシツカリと知りたいといふ知識の要求とが結び付いた時に、唯これを知るだけでなしに、これを信ずる、之を崇めるといふことになつて來る。これを或る人は神といひ、吾々は佛教の方で教へられた所に依つて本佛――根本の佛様といふ。此の根本の佛様といふものがあるから、此の佛の一切のものを護る力、即ち大慈悲の力といふものが自ら現はれて釋迦牟尼佛といふ佛様になつて、吾々の前に現はれて貴い教へをお説き下さつたのだと、斯う考へられる。それだから印度に現はれて五十年の間教へをお説きになつた佛様は、此の本佛が現はれた佛様であつて、決してこれを引離して考へてはならぬのである。此の世に出られた佛様を考へないで本佛を考へることは出來ない。

釋尊のやうな方が世の中に現はれて眞實の教へをお説き下さつたればこそ、この根本の佛様があるといふ有難さが分つたので、此の釋尊の有難さが分らずに唯だ本佛を考へても、それは雲を掴むやうなことになる。だから本佛と釋尊とを切離して考へることは出來ない。其處をウツカリすると空なものになつてしまふ。何かある、何處かにあると、斯ういふことだけになつてしまふ。併しその本佛の力が釋尊となつて現はれて、世の中では色々な人が色々な教へを説いたけれども、その中の最も優れた教へをお説き下すつたのだといふことが分つた時、その時初めて本佛の有難さが本當に分るのである。だから釋迦牟尼佛の教へを度外視して、これを離れて本佛を考へても、本當のものは捉へられない。

更に廣く考へて見れば、法華經の壽量品にあるやうに、佛様が必ずしも佛となつて出られないこともあり、或は佛の姿になつて現はれることもある。斯ういふやうに考へると、孔子が出たのも、耶蘇が出たのも、マホメツトが出たのも、それ〴〵

意義があるので、佛教以外のものを贋物と思つてはならない。吾々は佛教を信じても他の宗教を贋物と思ふには及ばぬ。一體宗教といふものは何か一つを信じなければならないが、一つを信じなければならぬといふことにはまた弊害があつて、一つを信ずると他のものは贋物だと思ふやうになる。そこで喧嘩が出來るのであるが、併し吾々は贋とは思はれない。吾々が孔子の論語を讀んでも、耶蘇教のバイブルを讀んで見ても、それが世の中を欺く爲に言つたものとは思はれない。マホメットのコーランを讀んで見ても、――あのコーランには隨分出鱈目も混つて居るけれども、やはりマホメットといふ人が命懸けで眞劍に說いてゐることが感じられる。これが世を欺く爲に說いたものだとは思へない。贋の教へが何百年も何千年も人の心を支配してゐる筈がないのである。人間はそんなに馬鹿ではない。三年や五年は胡麻化されるかも知れないが、千年も二千年も胡麻化されてゐるといふことはあり得ない。

佛教の信仰を助くるもの

併しながら何れも贋物ではないけれども、教へを說く人の力により、又本佛の力の現はれ方にもよるのであつて、その教への中に完全なものと、不完全なものとがある。十の中の三つ四つを說いたものと、十の中の七つ八つを說いたものと、十の中の十だけ說いた教へがあるわけである。吾々は大乘の佛教といふものがその有らゆる教への中に於て最も優れた教へであり、釋尊の大乘をお說きになつたことが、所謂本佛の尊い慈悲心を最も明かに、最も完全に現はし得たものだと思ふ。それで吾々は大乘の教へ、就中大乘の中に於て佛樣の御心持を遺憾なく打明けて說かれた法華經といものを信じたいと斯う思ふのである。

宗教は哲學や科學とは異ふから、幾つでも一度に信ずることは出來ない。信仰の中心は一つでなければならない。だから吾々は心の中心には法華經を置いて、法華經の信仰を助けるものとして、他の有らゆる教へを學ぶとかいふことは宜い事だと思ふ。自分のことを言つては可笑しいが、私などは今でも新譯全書の福音書といふ

ものを三日に一度ぐらゐは讀む。耶蘇教の信徒ではないけれども、あれを讀んで見ると、自分の佛教の信仰が非常に力強いものになつて來るのを感ずる。私がバイブルを讀んでゐると友達が來て、『お前は二心である。佛教の信仰をするといひながら何故バイブルを讀むのか』といふ。併し私はそれを心の中心には置かない。心の中心に置くのはやはり最も優れた教へでなければならない。

そこで此の釋迦牟尼佛が出られたといふことも本佛の力の現はれであるし、また吾々が釋迦牟尼佛の教へを學んでゐるといふことも、本佛の力に護られてゐる爲めであると思つて、此の釋迦牟尼佛の御心を打明けて說かれた、眞實の教へに對すると、何と言ひやうもなく高く貴く感ぜられる。それで之を名けて妙法といふ。初めに申上げた通り、法といふことに凡そ三色の意味がある。人の行ひを律するものを法といふ。或は教法といふものもあり、また宇宙の絕對の眞理を法といふこともあるが、それは結局一つである。教への中に說き明かされたものは理であるが、その

理がどうして分つたかといふと、吾々に佛性といふものが具はつて居るからである。而して本佛の大きな力が現はれて釋尊の教へとなり、又吾々の佛性となつたのであるから、その力のお蔭で其の教へが分るのだと思ふと、何と言はうか言ひやうがない。之を妙法と言ふより外はない。妙とは形容を絕し、言葉を離れ、文字を離れ、何とも言へない非常に美しいもの、尊いもの、有難いもので、これを妙法といふより外にいひ樣もない。その妙法の妙なることは蓮華のやうなものである。それでこれを妙法蓮華といふ。蓮華といふのを唯だ譬喩だと思つては不可ないといふことを天台大師が言つて居られるが、譬喩だと思つて不可ないといふのは唯だ其の言葉に囚はれず、妙といふ意味をシツカリ捉へなければならぬといふ意味なので、要するに法の妙なることは蓮華の如くだといふことに考へて差支ない。

印度では蓮華ほど美しいものはない。その美しさは日本では到底想像もつかないものである。土の色も汚ない。草や木にも刺が生えてゐる。水も皆濁つて居る。目

に觸れる物が皆な汚い毒々しい、其の中にあつて唯だ蓮の華だけが眞白に、或は眞赤に水の上に浮いてゐるさまは、本當に人間界のものとは思へない。大きな美しい華で、白いのも赤いのも、黄色のも青いのもある。それも不忍の池の蓮のやうに、水面から高く拔き出た所で咲いてゐるのではない。丁度日本の水蓮のやうなもので、水面に咲いてゐるのである。蓮の華の上に坐るといふことが、經典の中にもあるが、實際あの上へ坐つて見たら宜い氣持だらうと思はれる。

私は日本の蓮の華ばかりを見てゐた時は、印度の人は不思議なことを言ふと思つた。不忍の池の蓮などを見てゐると、あの上へ坐つたら直ぐ落ちるだらうと、たゞ危い感じがしてならないが、印度へ行つて見ると、實際あの華の上に坐つたら宜い氣持だらうと思ふ。實に美しい、その美しい蓮の華を法の妙なることに喩へて妙法蓮華といふ。だから妙法蓮華とは何を意味するかといへば、本佛の力の現はれたる一切の貴いものを意味するといふべきで、法といふのはたゞ教へといふ意味ではな

い。唯一つの本當の佛の御力が現はれて佛の說法ともなれば、天地萬物の美しい姿ともなれば、吾々の心にある佛性の貴い働きともなつたのであるから、これを何といはうか、いひやうも無いが若し强ゐて言へば妙法蓮華といふより外はない。妙法蓮華といへば、本佛及び本佛の力の現はれたる一切の美しいもの貴いものをいふのである。其の本佛の御力の現はれた一切の美しいものに就て、釋尊が四十何年の說法の後に於て、初めて吾々に成程と思ふやうに說き明して下すつたものが今に殘つてゐる。それが纏まつてゐるといふ意味に於て經といふ。經とは前にもいつた通り紐といふ字で、紐で物を縛るやうに、妙法蓮華の本當の意味を一纏めにして吾々に殘して下すつた。これが卽ち妙法蓮華經である

だから吾々が妙法蓮華といふ時に、實は文字に書いたお經のことだと思つては不可ない。吾々は文字に書かれたお經を通して、文字にも書けず、言葉でもいへない所の本佛及びその御力の現はれた一切を知らなければならないのである。たゞお經

の字を讀んで居るのではない。併し字を藉りないで、言葉を藉りないでは分らない。此の手懸りなしには何も分らない。例へば坐禪をして見ても、斯ういふ教へを學ばないで、獨りで悟りを開くことは難かしい。自分達は凡夫である。迷ひだらけの人間であるから、斯んな貴い教へを習はないで、唯一人で考へて悟らうと思つても、無理なことである。坐禪は良い方法であるけれども、貴い教へを聞いた上で、心を練る爲に坐禪するなら宜しいが、兎に角坐つて見る、坐つたら悟りが開けるだらうといふのでは悟りは開けない。教へほど貴いものはない。その教への纏まつたものが經である。それだから經は有難いのである。

斯ういふやうに吾々が妙法蓮華經を考へると、日蓮上人も仰しやつたやうに、妙法蓮華經は經に非ずして經の內容である。その內容とは、要するに本佛及び本佛の御力の現はれた一切の働きである。斯う考へた時に、これを唯だ有難いと思ふだけでは濟まない。此の有難い教へをよく學んで、自分の心を淨らかにし、自分の心を

南無といふこと

生れ變つたやうにしなければならぬ。そこで妙法蓮華と言つて居られなくなつて、自然に南無といふ字をつけなければならぬことになる。南無といふ言葉は『歸命』と譯してあるが、歸命といふだけでは物足らない。歸命とは何であるか。要するに信ずることであるが、たゞ信ずるだけでなく、此の教へを深く信じたら、必ず自分が佛の境界にも到達し得られるといふことを疑はないで、そこに大なる希望を持つことが、南無といふ語の中に含まれなければならぬ。

耶蘇教がヨーロッパに渡つてから、ヨーロッパの人はよくこれを分解して研究した。向ふの人は物を分解して研究することに長じて居る。卽ちローマ時代に於て三つの最も大切なことがあるといふことを耶蘇教の人が言つてゐる。近世になつても例の宗教改革をしたマルチン・ルーテルなども同じことをいつて居る。卽ち神を愛する、神を信ずる、神の救ひに就て望みを持つ。此の三つのことが最も大切だといふのであるが、どうも西洋人は物事を分けることに長じて居るから三つにしたが、

之を一つに纒めた時には南無といふことになる。

佛を愛する、信ずる、有難いと思ふ。これを信ずることによつて確かに自分の本來具へて居る佛性を發揮し得るといふ大きな希望を持つのである。西洋人は分解することが上手だからラヴ、フェース、ホープといふ。東洋人はこれを纒めて一つにする。例へば明月といふ語があるが、明月といふのはたゞ月が明るいといふことではない。明月といふだけで、月の光の皓々と照り渡つてゐる樣子も、晴渡つた夜の空に涼しい風の吹いてゐる樣子もスツカリ心に浮ぶ。斯ういふ點は東洋人が長じて居る。明といふ字を和英辭書で引くとクリーヤーと書いてあるが、これでは氣分が出ない。朧月といつても、朧といふのはたゞボンヤリして居ることではない。春の宵の長閑な、花の匂ひの中に月がポーツと浮んで、春風がソヨ〳〵と吹いてゐる、さういふ情景を朧月夜といふ語で現はして居る。西洋の言葉にして見ると恐らく二十にも三十にもなるだらう。アンビキヤス・ムーンなどといつても朧月にはならな

身口意の三業

い。

それで愛だの信だの希望だのといふのは西洋人の分解的の説明で、これを一つに纒めて『南無』といふ。吾々が皆佛に歸依して、佛を有難いと思へば救はれるといふ望を持つ。之を悉く『南無』といふ語に現はすのである。此の南無といふ語を形に現はせば合掌で、自分の心を皆纒めて佛樣に捧げるので、形でいへば合掌、口でいへば南無。そこで南無妙法蓮華經といふ言葉が出來て來る。

口で言ふのは譯はないやうだけれども、口で言へば心に響く、心に響けば行ひに現はれざるを得ない。それだから、吾々が南無妙法蓮華經といふのは口にだけ言ふのではない。口で言ふことが心持になり、心に信ずることが行ひになる。この三つを身口意の三業といふ。また身に行ひ、口で言ふことを續けて行けば心の信が愈々增す。心が淨くなれば又自然それが行ひに現はれざるを得ない。自分の口で言つたことは必ず自分の心を動さなければならぬ。役者が舞臺に立つて言ふ科白でも、本

當に悲しい所では必ず自分で泣く。私は怠けものでよく芝居を見に行つたが、まだ新富座の繁昌してゐた時分『夜討曾我』といふ芝居を見た。五郎十郎が親の仇工藤祐經を討つて、もう思ひ殘すことはない、頼朝の陣屋へ斬入つて死なうといふ時、これが兄弟の顏の見納めだといふので二人で手を取り合つて泣く。團十郎が其の場の五郎を演り、五代目菊五郎が十郎を演つて、毎日二人で泣いてゐたといふ。樂屋へ歸つて、『お前今日も泣いたナ。』『お前も泣いてゐたぢやないか』と、三十三日の興行中毎日泣いてゐたといふことである。芝居と雖も其の役に心を籠めて、これが本當の別れだなアといふ時は自然に涙が出て來る。それでこそ名優といはれるのであらう。

題目を唱へることを團十郎の科白と一緒にしては相濟まないが、道理は同じものである。題目を心から唱へたら、必ず深く之を信ずるやうになる。心に信じて行ひに現はれない筈はない。之を身口意三業の一致といつて、口に言ふことは心に信じ、心に信じたら行ひに現はれざるを得ない。斯う思へば題目を唱へることは非常に尊い。たゞ口だけで言ふのは役者の科白よりモツト詰らぬものになるかも知れない。

吾々は始終法華經を讀み題目を唱へるが、時々身口意三業の相應どころではない、口先だけでやつてゐることがある。口先だけの題目は口眞似にすぎぬ。往來を歩きながら南無妙法蓮華經といふ人がある。洵に殊勝のやうだけれども、南無妙法蓮華經といひながら墓口の落ちてゐたのを拾ふやうでは何の事だか譯がわからぬ。斯う考へて行くと、日蓮上人が法華經一部をこの七字に籠めて、これを唱ふることによつて人々の信仰を決定せよといはれたのは決して口先だけで唱へることをいはれたのではない。若し宇宙の問題に就て、また人生の問題に就て大きな疑ひを懷く人があるならば、心を打込んで法華經を讀誦するが宜い。さうしたら有らゆる問題が解ける筈である。併しそんな疑ひの起きない人は強いて疑ひを起す必要もない。一般の、宗教問題や哲學問題などに對して關心を持たない人は、日蓮上人が教

へられたやうに、題目を唱へることによつて、その心を佛と一致せしめ、その心持が行ひに現はれた時に於て佛の御心に適ふやうになれるので、卽ち南無妙法蓮華經によつて救はれると言ひ得るのである。

世間の忙しい人が皆法華經を研究しなければならぬといふことであつたら、それは到底出來ることではない。若しそれが宗教だといふのであつたら、要するに宗教といふものは迂遠なものになる。併し妙法蓮華經の題目を唱へさへすれば救はれるから、法華經を研究するのは無駄だとはいへない。心の中にいろ〳〵の問題があれば、その問題を解く爲に教への中に深入りして研究しなければならない。また法華經を讀んで、佛の本當の心持が分つたからと云うて、他の經典を排斥するには及ばぬ。どの經典も皆尊い信仰を養ふ力になるものである。幹があれば枝が出る。葉は枝に續いてゐる。此の法華經が他の經典よりも一段進んだ尊いものだと考へて、特に法華經を重んずることを『相待妙』といふ。卽ち他の經と相對して最も勝れてゐ

相待妙と絶待妙

るといふ意味である。又此の法華經を中心として見た時に、有らゆる教へが皆法華經の信仰を助けるものになるといふ、斯ういふ見方で他のものを一緒に見る時にこれを『絶待妙』といふ。それだから、法華經といふものは決して排他的なものではない。たゞ心の中心が立たないと不可ないので、――あれも宜しこれも宜しといふのでは結局纏まりのないものになるので、心の中心に南無妙法蓮華經の七字を据え、この中心から周圍を見廻した時に、どの經典も、どの教へも皆それ〴〵に價値をもつて來ることが考へられるのである。

これはなか〳〵難かしいことで、短い時間に私共のやうな信解ともに足らない者が强ゐて說明しようとしても、說明のつくことではないが、大體に於て『お前は何故に法華經を信ずるか』と問はれゝば、先づこの心持を以て私は法華經を信じて行きたい。今はつまらない者であるけれども、少しづゝでも、信仰が進むやうにとの念願を持つてゐる譯である。

二二、佛教流布の中心

佛は一切衆生を救護せんが爲に世に出て法を說かれたのである。如何なる愚者でも、また如何なる惡人でも、皆貴い佛性を具へて居るのであるから、いつかは必ず其の佛性が伸びて來る時があるに違ひない。佛は此の事をシツカリと見極められて、必ず一切の人を敎へ導いて、皆盡く其の本來具へて居るところの佛性を育て上げて、凡夫の淺ましい生活を離るゝことの出來るやうにしてやらうといふ大理想をもつて、常に敎へを說かれたのである。此の洪大なる慈悲を名けて『無緣の慈悲』といふのである。卽ち特に緣のある者ばかりを敎へらるゝのではない。如何なる者でも皆盡く敎へ導かれるといふのが佛の御心なのである。『緣なき衆生は度し難し』といふ語は昔から誰でも知つて居るが、佛の洪大無邊なる慈悲心の上からい

無緣の慈悲

へば、緣なき衆生といふものは無いわけである。緣のないやうに見えるものでも、苟くも其の心の底に佛性といふものが存在して居る以上は、全く佛敎に緣のないものとはいはれぬのである。譬へば種がありさへすれば必ず芽が出るのである。其の種が腐つてしまつては仕方がないけれども、其の種に生命がありさへすれば、之を土の中に埋め、之に淨い水をそゝぎ、暖い日の光りを當てゝやりさへすれば、其の芽の出方の速い遲いはあつても、芽の出ないといふことは決してない。

吾等の具有して居る佛性といふものも、決して腐つてしまふといふことは無く、たとへ微かながらも生命をもつて居るのだから、之を養ふ道さへ立てば、速いと遲いの差はあつても、いつかは必ず伸びて來る筈である。されば佛は如何なる愚者をも侮らず、如何なる惡人をも憎まれない。如何なる愚者や惡人に對せらるゝ時でも『これは決して自分と緣のない者ではない。いつか自分の與ふる敎へに依つて救はるゝ機會が得られるに違ひない』といふお考へであつたと思はれる。但し其の緣が

速く結ばれることもあり、非常に遲く結ばれることもある。それは一概にいふことは出來ない。法華經の方便品を讀むと、釋尊が舍利弗の請ひに應じて將に教へを說かんとせられた時に、『モウ聽聞する必要はない』といつて其の座を立つてしまつた者があつた。然るに釋尊は之を制止せられずして、彼等の去るがまゝに任せて置かれて、

舍利弗、是の如き增上慢の人は退くもまた佳し。

と仰せられたとある。增上慢とは未だ何の得る所もなくて、得る所の多い者であると自負して居る者であるが、釋尊は其等の者の座を立つて行くのを止められなかつた。是れは淺はかに考へると、佛の慈悲が足らぬやうにも思はれるが、決してさうではない。人を教へ導くのには種々の仕方があるので、其の人の性質と、其の周圍の事情と、その他いろ〳〵な條件をよく考へて、之に適切なる教へを與へなければ、その効果はないのである。佐藤一齋は幕末に於ける最も識見の優れた學者であ

るが、その『言志錄』の中に教育に就ての考へを述べて、

誘掖して之を導くは教への常なり。警戒して之を喩すは教への時なり。躬行を以て之を率ゆるは教への本なり。云はずして之を化するは教への神なり。抑へて之を揚げ激して之を進むるは教への權にして變なり。教へにも亦術多し。

とある。是れは文政十一年、五十七歲の時にかいたものであるが、其の長い歲月の間子弟の教育のために力を盡した體驗の結果と思はれて、まことに深い味ひがある。實際人を教へ導くといふことは容易な業ではない。

懇々と說き諭すのも或る時には必要であるが、又或る時には突き放してしまつて、自分で苦しんでから教へを求めるといふ念を起させる方が効果のある場合が少くない。殊に佛は洪大な慈悲心と絕大の智慧を具へて居られるのであるから、一々其の人に最も適切なやうに教へを與へられたのである。此の時に『退くも亦佳し』と仰せられたのは、彼等を見棄てゝしまはれたのではない。彼等を一度突き放し

て、他日彼等が自ら悔いてまた教へを求めて來た時に、懇切に教へてやらうといふ御考へであつたものと思はれる。また法華經の涌出品に於ては、多くの菩薩が釋尊に對して

世尊は安樂にして少病少惱にましますや。衆生を教化して疲倦すること無きを得たまへりや。

と申上げたのに答へて釋尊は、

如來は安樂にして少病少惱なり。諸々の衆生等は化度す可きこと易し。疲勞あること無し。

佛に疲勞なし

と仰せられた。前にもいつた通り、此の世を娑婆世界といふのは『堪忍』の義である。此の世界は人心が非常に險惡であつて、堪忍しなければ到底住んで居られぬ所であるから、之を稱して娑婆世界といふのである。斯ういふ世界に出て衆生を教化せらるゝに就ての苦心努力といふものは非常なものであつたに相違ない。然るに

釋尊は『少しも骨は折れぬ、何の苦勞もない』と仰せられたのである。

それは唯だ一切衆生を救ふためには如何なる苦勞をも苦勞と思はぬといふ意味ばかりではない。今のところでは愚者と見え惡人と見える者も必ず後には佛法に歸依するやうになるといふことを確信して居られるので、『化度すべきこと易し』とも、『疲勞すること無し』とも仰せられたわけである。されば苟くも佛教を信ずる者は、他日一切衆生が盡く佛教に歸依する時があるに違ひないといふことを確信して、自分達がたとへ少しでも佛教の世間に流布する上に貢献することが出來るならば、此の努力は朽ちず亡びずして永く後に遺るものであると思ふべきである。

佛教以外の諸教

但し世間には佛教以外にも種々の教へがある。其等の多くの中には甚しく幼稚なものもあり、又不健全な思想を多く含んで居るものもあるけれども、中には隨分教へとして價値のあるものも決して少くはない。從來佛教信者の中には佛教以外の教へを盡く邪教であるとして、極端に排斥するやうな人もあるが、私などには決

してさうは考へられない。例へば耶蘇教のバイブルを讀んでも、或は孔子の論語を讀んでも實に立派なものだと思ふ。幾度讀み返して見ても、その度にいつも大なる感激を覺える。勿論私は大乘佛教に勝つた教へは決して無いといふことを固く信じて居るから、どんな間違ひがあつても私の信仰を改めて耶蘇教や儒教の信者にはならぬつもりであるが、私は自分の心の中心には釋尊を置いて、なほ私の信仰心を養ふ助けとして、いつも論語其の他の經書を讀み、又バイブルなども讀んで居るのである。

私は機會のある毎に、自分の知つて居る人に佛教に關するものを讀むことを勸めて居るけれども、前にもいふ通り、佛教の用語が非常に難かしいために、バイブルのやうに讀んで直ぐ大體の意味が解る人は至て少い。儒教のものは勿論バイブルなどよりは遙かに難かしいけれども、それでも佛教の經典などを讀むよりは餘程樂である。此の難かしい佛教の經典を誰にも解り易く讀ませる方法を立てることが必要

だとは私なども疾うから感じて居るが、何分にも自分に其の力のないのが甚だ殘念でもあり、又相濟まぬことにも思つてゐる。併し最も善いものが最後の勝利を得べきことは疑ひがない。若しさうならぬなら、人生といふものが無意味なものになるわけである。孟子が梁の襄王に面會した時に襄王が『天下惡くにか定まらん』と問うたので、孟子は『一に定まらん』と答へたといふことがある。如何に多くの國が對立して居ても、其の最も勝れたものが之を統一するのに違ひないのである。宗教も亦其の通りであつて、如何に多くの教へが對立して居ても、終には其の中の最も勝れたものによつて統一せられなければならぬ筈である。併しながら其の他の教への中でも多くの善い事が教へられて居るのであるから、さういふものは決して亡びないで、其の一つの教への教義の中に包容せられて永く遺るにちがひない。

唐の妙樂大師は天台宗の學者の中では殊に優れた人であるが、佛教と儒教との關係を說いて、

禮樂前に駈せて眞道後に啓く。

といつた。禮樂は儒教に於て教へらるゝ所である。眞道とは卽ち佛教のことである。佛教は支那の後漢の代に初めて傳はつたのであるが、禮樂の完成したのは周の代の始めに周公旦が攝政として天下を治めた時で、それは佛教の傳はつた時より八百餘年前である。孔子が儒教を說き初めた時は佛教の傳はつたのよりは五百八十年ばかり以前に當る。されば支那で禮樂の教へられて居たのは隨分久しいことであるが、妙樂大師はそれが佛教の流布に大に役に立つて居ると考へたのである。勿論佛教徒から見れば、儒教といふものは佛教よりも淺いものであるけれども、兎にも角にも人といふものは道を重んじ教へを貴び、常に自己の修養に努めなければならぬといふことが儒教に於て充分に教へ込まれて居た。そこへ佛教が入つて來たから、佛教の弘まり方が早かつたので、儒教は佛教の前驅を爲すものとして大に役に立つて居るといふのである。また天台大師は金光明經の中に、

若し深く世法を識れば卽ち是れ佛法なり。

とあるのを引いて、世間の一切の教へは、何れも深入りして行けば、佛教に歸着しなければならぬものであるといふことを說いた。例へば親子兄弟夫婦の間には定まつた道がなければならぬのであるが、此の親子兄弟夫婦の關係はたゞ此の世の五十年や六十年の關係ではなく、前の前の世からの種々の緣が熟して來て、此の世で親子となり兄弟となり夫婦となつたのであるといふことを學ぶならば、互ひに愛しあひ扶けあふといふ念が非常に强くならなければならぬわけである。是れは唯だ一つの例に過ぎぬが、如何なる教へでも深入りして行けば、結局大乘佛教の教理に落ち着くことになるのである。自分達は斯ういふ自信をもつて、佛教以外の教への價値をも認め、佛教以外の教へを信じて居る人がモツト深入りして、皆佛教を信奉するやうになることを理想として、益々吾等の信心を勵んで行きたいと思つて居るのである。

さて此の佛教なるものは印度に起つたものであるが、今の印度は佛教國ではない。今の印度に於ては婆羅門教とマホメット教とが殆んど互角の勢力であつて、此の二つの信徒が印度人全體の凡そ九割を占めて居る。其の殘りの一割が佛教とジヤイナ教との信徒であるが、それもジヤイナ教の信徒の方が多數なので、佛教徒といふものは殆んど無いといつても宜いくらゐのものである。尤もセイロン島には佛教の寺もあるが、そこで說かれて居ることは小乘佛教の而も至て淺薄なものである。先づ大體からいへば、今の印度は佛教と離れてしまつて居るといつても宜いのである。併し佛教が其の發祥の地たる印度に廢れて居ることは少しも佛教そのものの價値を上下するには足らぬのである。儒教は支那に起つたものであるが、今の支那人は全く孔子の教へと正反對のことばかりをやつて居る。耶蘇教はユダヤに起つたものであるが、今のユダヤ人の信仰は耶蘇の教へた所とは非常に背馳して居る。けれども此等の事實は孔子や耶蘇の教へた事の價値を少しも傷つけるものではないので

釋尊の降誕は世界の爲

ある。

私は前年印度へ行つて佛跡を巡拜したが、釋尊が初めて說法せられたといふ鹿野園の故跡を訪うた時には或る英國人が道連れであつた。其の英國人が私に『君は何か信仰をもつて居るか』と問うたので、私は『佛教を信じて居る』と答へたところが、『佛教は印度に起つたものであるが、今の印度では殆んど佛教といふものが廢れ果てゝ居る。斯んな事では佛教が普く世界に弘まるといふ見込みは立たないではないか。君は佛教徒として此の現狀を見て心細くは感じないか』といつた。私は之に對して『イヤ少しも心細くは感じない』と答へた。その英國人は不思議そうな顏をして、『それはどういふ譯であるか』と問うたので、私は之に答へていつた。『一體釋尊が印度に御生れになつたのだと考へるのが間違ひなのである。釋尊は世界人類の爲に御生れになつたのであるから、吾々は釋尊を印度人とは思つて居ない。釋尊は印度に御生れになつたから、最初に婆羅門教を學んで、それよりも深い佛教を創め

られたのであるが、若し支那に御生れになつたなら、所謂王道を研究して、それより更に深い教へを立てられたことであらう。吾々は釋尊を印度人と考へるには及ばぬ。釋尊は印度といふ一國に私せらるべき方ではない。佛教が印度に廢れたのは印度人が佛教のやうな深い教へを理解すべき力を失つたからであつて、佛教が價値のない教へであるからではない。佛教は今吾が日本に榮えて居る。それは日本人が佛教の深い教理を理解し得るやうな國民であるからである。譬へば日本の枇杷は支那から移植したものであるが、今では日本の方が支那よりも餘程旨い枇杷が出來る。それは日本の風土が支那よりも枇杷に適して居るからである。佛教も其の通りである。佛教は印度に起り、支那を通じて吾が日本に傳はつたのであるが、日本人が最も善く佛教を理解する力をもつて居るから、今では日本のみが世界に於ける佛教國となつて居るのである。君の國の人は皆耶蘇教を信じて居るやうだが、佛教は耶蘇教よりも遙かに勝つたものであるから、何れ此の佛教が君の國にも傳はつて耶

蘇教に代る日があるであらう。佛教が日本に廢れぬ限りは、たとへ印度に廢れて居ても吾々は少しも失望せぬ。』私は斯う答へて其の英國人と別れた。向ふでは負け惜みだと思つて居たかも知れぬが、私は斯う信じて居るのである。

『一切衆生』といふ中には世界全體の人が含まれて居るのであるから、佛教を信ずるものは必ず世界の凡ての人が佛教に歸依するやうになるものと考へて居なければならぬのであるが、併し物事には順序がある。宗教は世界的のものだといつても、世界に普く弘まるのには、其の流布の中心となるべき國がなければならぬ。一般の人には教義の優劣などはさう明かにわかるものではない。それで或る一つの國の國民が或る宗教を皆信じて、その爲に其の國の國勢も著しく發展し、また其の國が他の國に對して能く信義を守つて居るといふことが明かになれば、その時初めて他の國の人も此の宗教に歸依しようといふ念を起すわけである。現に私の知つて居る人で英國へ行つた時に、旅行をするのに荷物をチツキ無しに貨物列車に積み込ませ

ても、少しも間違ひの無いのを見て非常に感心して『英國人はどうして斯ういふ良い習慣を作り上げたのであるか』といつて、ロンドンの或る大學の先生に尋ねたところが、其の大學の先生が『其の理由が知りたければ此の本をお讀みなさい』といつて、一冊の小さい本をくれた。其の本をホテルへ歸つて讀んで見たら耶蘇教のバイブルであつた。それから其の人はバイブルを熱心に讀んで、終に耶蘇教の熱心な信者になつてしまつた。斯ういふ例を考へて見ても、佛教が普く世界に弘まるに就ては、先づ何れの國にか此の教へが弘まつて、其の國の國民生活の基礎が佛教に依つて立つやうになり、そこが中心となつて次第に世界に弘まるといふのでなければなるまい。華嚴經の中に、

人は王を以て命と爲し、王は政法を以て身と爲す。世道既に和平なれば、佛法玆よりして始まる。

とあるのも、要するに何れかの一國が佛法の普く世に流布すべき中心となることをいつたものと思はれる。

それで私は日本が中心となつて、將來此の大乘佛教が普く他の國へも弘まつて行くべきことを信じて居るのである。佛教は印度に起つて、支那を經て吾が日本へ傳はつたのであるが、今では印度にも廢れ、支那にも廢れて、獨り日本にのみ榮えて居る。此の事は決して偶然とは思はれない。吾が日本は佛教に特別に深い緣のある國と思はれる。是れは獨り私だけの考へではない、昔の人にも斯ういふ確信をもつて居た人があつたのである。此より進んで日本國と佛教との深い因緣に就て考察して見たいと思ふ。

二三、日本國と佛教

吾が日本國と佛教との特別の關係を考へる前に、佛教が印度から東洋へ傳はつて

來た徑路に就て少しく考へて見なければならぬ。吾々の今讀んで居る法華經は支那の後秦の弘始七年（今より凡そ一千五百三十餘年前）に鳩摩羅什に依つて譯されたものであるが、此の鳩摩羅什は元來印度の東方に在る龜茲といふ國の人で、其の靑年時代には諸國を歩いて修行をしたのである。其の修業中にはいろ〳〵な人に敎へを受けたのであるが、其の中で最も勝れて居たのは須梨耶蘇摩といふ人であつた。此の人が法華經の原本を羅什に與へたのであるが、その時に羅什に向つて、

佛日西に入つて遺耀將に東に及ばんとす。此の經典は東北に緣あり。汝愼しんで傳弘せよ。

といつたといふことである。太陽が西に沒するやうに、佛は既に御入滅になつたけれども、其の遺された敎へは漸次に東の方へと弘まつて行くべきであるといふのである。此の事のあつたのは、釋尊の御入滅以後殆んど千年に近い頃であつたがその頃には印度及び西域（印度と支那との中間の地方で、龜茲なども其の中に含まれて居たのである。）地方の佛敎信者の間に一般に斯ういふことが考へられて居たものと思はれる。

それより前に、佛の入滅後九百年の頃に天親といふ人が印度に出て瑜伽論といふものを著はしたが、其の中にも、

東方に小國あり、其の中には唯だ大乘の種性のみあり。

とある。斯ういふやうに佛敎が東方の國へ傳はつてから大に發展するといふことを、印度や西域の人達が考へるやうになつたのは大に注意すべき事といはなければならぬ。佛は一切衆生を盡く救ふつもりで敎へを御說きになつたので、佛敎を信奉する者は皆此の敎へがやがて世界に弘まつて、一切の人を救ふやうになることを確信して居たに違ひない。勿論釋尊は印度に御出現になつたのであるから、先づ佛敎が印度全體に弘まつて行くべきである。然るに佛滅後數百年を經ても印度人の全體が佛敎に歸依するといふだけにも行かず、又將來さういふ日が來やうといふ見込

統一なき印度

みも立たぬやうになつたのである。それには種々の事情もあるが、先づ第一に擧ぐべきは、印度は大國であるけれども、昔から統一のつかぬ國であつたといふことである。昔から印度では小國が多く對立して居て、之を統一すべきものは無かつた。釋尊の當時に於ても、ヒマラヤ山の南方の所謂中印度に釋迦族の王を戴く國が十ケ國以上もあつたといふことである。それは何れも王國として獨立する力のあつた國なので、その他に獨立するだけの力がなく、此等の國の何れかの附庸として其の保護を受け、僅かに存在して居た國もあつた。斯ういふやうに多くの國が對立して居れば、自然其の間に勢力爭ひも起り、國際の關係が面倒であつて、互ひに其の煩はしさに堪えぬといふ有樣であつた。其の樣子は多くの經典の中にも自が現はれて居る。

佛教の興らぬ前の婆羅門時代から、轉輪聖王の出現といふことが考へられて居たが、終に其の實現を見ることは出來なかつた。非常に優れた德のある王が出れば天

も之を護るのであるが、天が之を護るといふ印として天より輪寶といふものを與へられる。王が此の輪寶を捧げて進めば、之に敵對する者は無くて、やがて天下を統一することが出來るといふのである。斯ういふことが遠い昔から言ひ傳へられてあるのは、久しく小國の相對立して居た其の弊に堪へないで、天下の靜謐になることを熱望する人々の心が自ら現はれたものと見るべきであらう。此の如くに國際の關係がいつも面倒であつて、何れの國でも盛衰の變化が劇しいと、『大に努力しやう』とか、『自分の努力に依つて自分の運命を開拓しやう』とかいふ考へを持つものは自ら少くなつて、先づ天に祈つて福を求め、禍を避けやうといふやうな考へをもつ者のみが多くなるから、佛教のやうに深遠な教へには殆んど寄りつかないで、婆羅門を賴んで天の加護を求めるといふ者のみが多くなるのである。

尤も一般人民に無教育の者が多かつたことも、迷信の方が勢力をもつやうになつた大なる原因に相違ない。それで釋尊は國王を教化することに特に力を注がれたや

うである。國王とか大臣とかいふ人々は何れも相當な教育があるから、宗教の選擇をするだけの力を確かにもつて居る。又何れも人民に對して大なる勢力を持つて居たのであるから、國王大臣等が先に立つて佛教に歸依することになれば、一般人民も自ら之に誘はれて佛教を重んずるやうになるわけである。守護國界主經といふ經の中に此の事が、まことに面白い譬喩を用ゐて說かれてある。國界主とは卽ち國王のことであるが、佛が特に國王を重しとせらるゝといふことを聞いて、御弟子の一人が、

諸佛は平等三昧に住し、等しく衆生を視ること猶ほ一子の如しと。今云何ぞ但だ國界主を守護すといひ、諸有の貧窮孤惸の困苦して依なく歸なく救なく護なきものを、何ぞ愍念して守護したまはざる。

と問うた。之に對しての佛の御答へは、

諸佛如來は平等三昧に住せざるにあらず。平等に由るが故に國王を守護す。善男子、譬へば良醫の小き嬰孩を見るに、身疾病に縈り醫藥に勝へず。乃ち良藥を以て母に之を服せしめ、母の服藥の力乳に及ぶに由り、其の子乳を飲めば疾病皆除るが如し。諸佛如來も亦復た是の如く、一切を哀愍して國王を守護す。

とある。小兒が藥を消化する力のない者であれば、母親が其の藥を消化して、その乳を飲ませて小兒の病を癒すより外はない。一般人民が思慮分別の足らぬのは小兒のやうなものであるから、國王が佛教の深い教理を自ら能く味うて、之に依つて人民を導いて行かなければならぬといふので、其の頃の印度には最も適切な教へであつたと思はれる。仁王經に、

佛波斯匿王に告げたまはく、是故に諸〻の國王に付屬して、比丘比丘尼に付屬せず。何を以ての故に。王の威力無ければなり。

とあるのも同じ意味である。『付屬』といふのは佛法を普く世に弘むべき大任を負はされるのであるが、それは王の威力があつて初めて出來ることだといふのであ

る。

佛の思召は此の如くであつたが、此の事が印度ではいつ迄經つても實現されなかつた。尤も佛滅後三百年の頃に阿育王といふ非常なる名君が出て、殆んど印度を統一し、佛教の興隆に力を盡したことがある。又佛滅後六百年の頃には迦膩色迦王といふ名君が出て、阿育王に匹敵するほどに統一の事業に成功し、大に佛教の興隆に力を盡した。併し此等の名君も其の沒後に於て其の志を嗣ぐ者がなかつた爲に、其の努力の効果がそれ程に永くは殘らず、又一たび統一された國土も忽ちにして四分五裂となるといふやうな狀態で、此の印度が全く佛教の國となり、此の國が中心となつて普く世界に佛教が弘まるといふことは到底望まれぬといふことが、佛教徒の間には次第に強く感じられて來たわけである。此の時に當つて印度や西域の人は東方に支那といふ大國のあることを聞いて、大に此の國に望みを屬するやうになつた。

支那は漢に代に入つてから其の力が次第に西の方へ伸びて行つた。前漢の武帝の時に初めて西域諸國との交通が開けたが、それは佛滅後四百年に近い頃であつた。此より西域との交通は絶えないで、後漢の明帝の時に至つて佛教が西域から支那に入つたのは誰も能く知る所であるが、それは前漢の武帝の代に西域と交通を開いてから百八十年ばかり後である。支那の漢の代は中途で王莽が國を奪ふといふやうな出來事があつたけれども、光武帝がまた漢の天下を復興したものであるから、前漢と後漢とを併せて劉氏の天下といふものは四百餘年も續いたわけである。その後所謂三國の時代は五十年ばかりで晉の代に又統一せられ、是れは僅かに四十年ばかりで統一を失ひ、隋が天下を取るまで二百數十年の間に幾つかの國が迭る〳〵起つたのであるが、此の間に於ても支那の力といふものは機會のある毎に西域へ向つて伸びたのである。

それで西の方から見れば、兎に角支那は印度などよりも力の強い國と思はれた

に相違ない。其の內輪にはいろ〳〵の變化があつたにしても、兎に角其の力が外へ向つて伸びるのだから、外から見れば力强い國と見えるわけである。殊に後漢の代からは佛教が傳はつて、道士などが隨分いろ〳〵と手を盡して妨げをしたけれども、益々盛んになつて行くといふことが、自然に西域地方へも聞えて居るので、支那に佛教が普及したならば、必ず將來に於て普く世界に弘まる所の中心となるであらうといふ希望を懷くものが印度や西域地方の佛教信者の中に多くなつたやうである。天親のいつた事でも、須梨耶蘇麻か羅什にいつた事でも、何れも皆斯ういふ思想の現はれたものを見るべきであらうと思ふ。中にも羅什の如きは佛教を東方に弘めることを自分の天職と確信し、所謂『不惜身命』の覺悟を以て之に當つた。羅什の父親は印度から龜玆へ來た人であるが、大乘佛教を究めて學德共に非常に優れて居たので國王が深く之を信じ、王の妹を妻として與へられ、此の夫婦の中に羅什が生れたのである。羅什は七歳の時から出家して佛教を學び、殊に西域諸國を歷

不惜身命の決心

遊して研究を重ねたので、龜玆國では上下擧つて之を尊信し、其の上に國王からも厚い保護を加へられたのであるから、龜玆國に落着いて居さへすれば固より一生は安樂なものであつたのに、自分は大乘佛教を東方へ弘めるといふ天職をもつて居るといふことを確信し、其の機會の來るのを頻りに待つて居た。ところが秦の王符堅が建元十八年、卽ち羅什の三十九歳の時に、其の將呂光といふ者を遣つて龜玆を討たせた。羅什は兼て待ちに待つて居た機會が愈々到來したのに、何にも換へられぬ悅びを感じて、自ら呂光の陣に身を投じて支那へ連れて歸ることを求めた。

勿論呂光も前から此の國に羅什といふ高僧の居ることを聞いて居たのであるから、充分に之を優待して支那へ伴ひ歸つたのであるが、兎も角も敵國へ身一つで赴くのである。何時どういふ事が起るかも判らぬ。身命を惜まぬといふ覺悟がなくて行けるものではない。法華經の觀持品に於ては諸菩薩が釋尊に對して其の決心を說いて

我身命を愛せず、但だ無上道を惜む。

といつた。無上道とは卽ち佛の眞實の敎へのことである。此の眞實の敎への世に廢れんことを惜むのあまりに、自分の命などは何とも思はぬといふのである。羅什が支那へ行つた時の心持も正しく此の通りであつたに違ひない。羅什はやうやくの思ひで支那へ行くことが出來たけれども、大乘佛敎を弘める爲に力を盡すべき機會はなか〳〵容易に來なかつた。呂光が羅什を伴つて支那に歸着せぬ前は其の主人たる符堅は其の臣下の姚萇のために殺されて其の國は亡び、姚萇が之に代つて王と稱したので、呂光は涼州で獨立して之に對抗し、羅什を涼州に引止めて置いて何等の活動をもさせなかつた。その後姚萇が死んで、其の子の姚興が王となるに及んで國勢が著しく盛んになつたので、兵を起して呂光を討つて之を降し、羅什を長安の都に迎へたが、それは弘始三年のことであつた。羅什は支那に着いてから二十年目で初めて其の宿望を達し、大乘佛敎の弘通に力に盡すことが出來るやうになつ

たのである。此の姚興といふ王は賢明な君主で、殊に佛敎の信仰も非常に厚かつたから羅什を國師として待遇し、經論の漢譯に力を盡させたので、羅什は此より弘始十五年に七十歳で死ぬまでの間に七十四部、三百八十四卷の經論を譯出し、その弟子は三千人に達したといふことである。

今擧げたのは羅什一人のことであるが、此と殆んど似たやうな苦心努力をして支那に於ける佛敎の弘通に力を盡し、また經論の飜譯に力を盡した人々は數ふるに堪へぬほどである。其の功勞に對して吾々は深く感謝しなければならぬのである。殊に私などは梵語といふものを全く知らず、たゞ漢譯の經論のみに依つて佛敎を學ぶのであるから、昔の人が吾々の爲に生命をかけて斯ういふものを譯して置いてくれたのだと思ふと、勿體ないやうに感じられる。吾が國の佛敎は支那から傳はつたものである。若し支那に佛敎を傳へることに力を盡す人がなかつたなら、吾が國へも傳はらなかつたであらう。斯う思ふと吾々は羅什とか玄奘とかいふ人々の苦心努

力が何よりも貴く感じられるのである。今日の支那では佛教が全く廢れて居るけれども、日本に佛教の泯びぬ限り、彼の人々の苦心努力も決して泯びぬわけである。

さて支那へ佛教を傳へることに努力した人々は、支那が中心となつて、やがて全世界に佛教が弘まる時が來やうと考へて居たのであらうが、その望みは空に歸してしまつた。支那は吾が日本と異つて革命の度々ある國である。又堯舜の時代から今日までいつも漢人種が其の中心となつて居るのではなく、屢々他國人が入り込んで政權を握つたのであるから、その度毎に風俗習慣が根本的に變るのみならず、學問文藝でも乃至宗教でも皆其の影響を受けなければならぬわけである。斯ういふ國が佛教の世界に弘まる中心となるといふことは到底望まれぬ。獨り吾が日本國は申すまでも無く、世界に比類のない國で、古來幾多の變遷があつても國體には微塵も動ぎがない。印度や支那などゝは全くちがふ。明治天皇の御製に、

ひろくなり狹くなりつゝ神代よりたえせぬものは敷島の道

と申すのがある。或る時は上下擧つて吾が國體の尊いといふ自覺を強くもつて居ることもあり、又或る時は外から入つて來た思想が非常なる勢力をもつて、殆んど日本故有の思想は掩はれてしまつたかと見えることもあつたが、皇室の御威德は前後を通じて少しも變らせられず、又臣民の皇室を仰ぎ奉る至誠も前後を通じて更に變らぬのである。廣くなり狹くなるやうに見えるのは、たとへば太陽に雲が懸つたり、霽れたりするやうなもので、太陽そのものゝ光りは千萬年を通じて少しも變らぬのである。

此の日本國に佛教が弘まり、上下擧つて信仰を一にする時が來れば、印度や支那のやうに變動常なき國とは全くちがふのであるから、此の國が中心となつて普く世界に佛教が弘まるのも決して望み難い事ではない。釋尊の御出現になつた印度に佛教が榮えないで支那に傳はり、支那にも榮えないで吾が日本に傳はり、日本に於てのみ榮えて居るといふことは決して偶然ではない。日本に於て深く大乘佛教を究

めた人々が、此の最勝の教へが此の最勝の國たる日本國に弘まり、此の國が中心となつて普く他の國々にも弘まつて行くに違ひないといふ確信をもつやうになつたのは、まことに道理のあることである。

殊に吾等の注意しなければならぬのは、叡山に於て初めて『大日本』といふ名の用ひられたことである。『日本』といふ名は其の以前から定まつて居たのであるが、未だ『大日本』といふ語はなかつた。然るに傳教大師が叡山を開き、桓武天皇の御保護によつて次第に榮えて行くやうになつてからは、『鎮護國家の三部經』として法華經金光明經仁王經の三部が常に讀誦せられ講説せられた。此の三經に説かるゝ所はそれ〴〵に特色があるけれども、正しい教へを基礎として治めらるゝ國が永く榮えて、やがて所謂淨土も此の娑婆世界に實現せらるゝに違ひないといふことを力説せられた點に於ては、三經共に一致して居る。此の三經が講ぜらるゝ時には必ず佛前に於て長い告白文が讀まれるのであるが、其の中の弘仁四年六月（今より千百二

十五年前）に讀まれた『長講金光明經會式』の中に、

多問薫習念々に增し威光增益して叡山道場の正法藏大日本國及び九院を守護し、佛法を興隆して後際を盡すまで、恒に一乘を説いて群生を利せん。

とある。其の頃までは支那を先進國として重んじ、萬事支那に習ふといふ風であつたのに、吾が國を特に『大日本國』と呼んだのは大に注意すべきことである。それは確かに此の日本國が將來は凡ての國を指導すべき地位に立つものであるといふ確信に出るものと見るべきである。

二四、正義と慈悲

吾が日本は正義の國である。吾等が此の國の發展の爲に力を盡すのは卽ち正義を護るために外ならぬのである。吾が建國の昔を案ずるに、神武天皇は御歲四十五に

達せられた時に、日向を發して大和に向ふべき御決心をなされたのであるが、其の時に先づ天孫降臨以來の事を御説明になつて、

蒙くして以て正を養ひ此の西偏を治せり。

と仰せられた。蒙くしてといふのは、潜んで時を待たれた意味である。此の久しい歳月の間日向に於て如何なる事に力を盡させられたかといへば『正を養ふ』といふことに專ら力を盡させられたのである。此處に日本をいふ國の特色の存することを知らなければならぬ。東洋にも西洋にも昔から多くの國があるけれども、何れも皆力を以て國を建てたものである。例へば支那の歴史は黄河の上流から入り込んで來た漢人種が、力の弱い土民を征服して、そこに國を建てたのを以て始まるのであるが、其の他の國にでも皆同樣である。されば日本以外の國では何れも力を養つて其の國を發展せしめたものである。獨り吾が國はさうでなく、神武天皇は『力を養ふ』とは仰せられず『正を養ふ』と仰せられた。日本國は力づくで發展する國

ではない、正義を弘むる爲にのみ發展すべき國であることが、御一言によつて明かに示されてあるのは眞に貴いことである。

更に神武天皇は天孫以來の御統治の有樣を重ねて御説明になつて、

皇祖皇考乃ち神に乃ち聖にして、慶を積み暉を重ねて多く年所を經たり。

と仰せられた。御歴代の御德に依つて國がまことに能く治まり、至て平和に又幸福に多くの歳月が送られて來たといふのである。さて日向地方は斯く幸福に治まつて居たけれども、他の諸地方では皆力づくで相爭ふといふ狀態であつた。卽ち、

而るに遼邈の地は猶ほ未だ王澤に霑はず。遂に邑に君あり村に長あり、各自に彊を分ちて相凌轢せしむ。

といふやうな事であるから、天皇は此の『正を養ふ』の心を普く日本全國に及ぼし、此の國中に正義が行はれるやうにしたいといふ思召から、日本國の中央に當る所の大和地方に國の都を奠めやうといふ御決心をなされたわけである。

さて日向を發せられてから六年の後に至つて大和地方を全く御平定になり、橿原の宮に於て帝位に即かせられた時の　勅　には、

夫れ大人の制を立つる、義必ず時に隨ふ。苟くも民に利有らば何ぞ聖造に妨げあらん。

とある。聖造とは天子の法を立て國を治めらるゝ御事業であるが、それはたゞ民に利あることを目的とせらるゝのであると申すのである。民に利あるとは如何なる事であるかといへば正義の行はるゝ事より外には何もないのである。人々が正義を守つて私心を去り私欲を斥け、互ひに重んじあひ扶けあつて生きて行くより幸福なことはないわけである。されば天皇は之に續いて、

上は則ち乾靈國を授くるの德に答へ、下は則ち皇孫正を養ふの心を弘めん。

と仰せられたのである。乾靈とは卽ち天照大神である。天照大神が天孫を此の國へ御遣はしになつたのは、此の國を正義の國たらしめやうとの神意に依るもの

正を養ふの心を弘む

で、天孫降臨以來は此の神意に基いて『正を養ふ』ことを主として國を治められた。それを更に日本全國に推し弘めんが爲に帝位に即くのであるとの御趣意である。苟くも日本國民たる者は飽くまで此の御趣意を守つて行かなければならぬ。正を養ふ心を弘むるといふこと以外に日本國民の發展すべき道はないのである。

爾來皇室に於かせられては國民をして皆正義を重んずる心を養はせやうとして、教化に力を盡させられた。國民を教化することが國王としては第一の務めであるといふことは大乘の經典の中に於て繰返して說かれてあるが、吾が國の皇室に於かせられては實に此御精神を以て終始せられたので、例へば崇神天皇の十年に所謂四道將軍を御派遣になつた時の　勅　にも、

民を導くの本は教化に在り。今既に神祇を禮し災害皆耗きぬ。然るに遠荒の人等は猶ほ正朔を受けず。是れ未だ王化に習はざるのみ。其れ群卿を選みて四方に遣はし朕が意を知らしめよ。

とある。實に吾が國の皇室は吾等の上に君臨したまふのみならず、父の子に對する恩愛の情を以て吾等を撫育したまひ、師の弟子に對する情誼を以て吾等を教へ導きたまひ、所謂『主師親』の三德を完全に具備せらるゝことは感激の外なき次第である。

國民たる者が此の洪大無邊なる御恩を忘れず、眞に日本國民たる自覺をもつて各自の務めを果す爲に、いつも全力を打込んで居れば、申分はないわけであるが、社會が次第に複雜になり、人々の生活に骨が折れて來ると、ツイ萬事を自己中心の思想で解釋するやうになるものである。譬へば電車に乘るのでも、日中の乘客の少い時には大概な人は老人や小兒が來ると、『マアお先へ』といつて先へ乘せるが、暮方などの非常に混雜する時になると、『エ、邪魔だ』といつて老人や小兒は突き退けて、自分だけ急いで乘る。世間の事がそれと同樣である。それであるから、日本の國民は非常に優れた國民性をもつて居るのであるが、此の國民性を涵養して、如何

聖德太子の時代

なる多事多難の中でも立派に越えさせやうとするのには、最も優れたる教への力に依らなければならぬといふことになるのである。此處に着眼せられて、佛教の興隆に特に力を御盡しになつたのが聖德太子である。

聖德太子は推古天皇の元年に二十一歲にして攝政の大任に御着きになつた。（今より千三百四十五年前）此の時の日本國は內外共に多事多端であつた。支那は後漢の末（卽ち神功皇后の攝政であらせられた頃）から三國に分れ、その後は前にいつた通り種々の變遷を經たが、大體に於て統一がつかなかつた。然るに吾が崇峻天皇の御宇に南方から起つた隋が之を一統した。實に三百數十年振りのことである。此の隋の代はあまり長く續かないで唐に變つたのであるが、一時は非常な勢ひで先づ朝鮮に其の力を伸しウツカリして居れば吾が國へも壓迫を加へて來さうな狀態であつた。斯ういふ時こそは擧國一致の必要が痛感せらるゝわけであるが、當時の日本國民は殆んど其の自覺をもつて居なかつた。當時の吾が國に於ては蘇我氏とか物部氏

とかいふやうな所謂豪族の力のみが盛んであつて、朝廷の百官を始め各地方の官人に至るまで、何れかの豪族と結び付いて一身の安穩を謀り、立身出世を謀るといふ有様で、國のために協力しやうといふやうな心得のある者は殆んど無かつた。一般人民は教育の程度も至て低く、又責任ある地位に在るわけでも無いから、先づ官人等の動く通りに動くといふより外はなかつた。聖德太子の憲法第一條に、

人皆黨有り亦達者少し。

とあるのが正しく其の當時の實情と思はれる。黨といつても此頃あるやうな政黨では無く、豪族を中心としての黨であるが、其の黨に屬して居る者に達者が少い。達者といふのは卽ち達觀する人である。日本の國の現狀がどうであるかといふことをスツカリ見透して居る人が殆んど無くて、皆其の黨の勢力を利用して一身の榮達を求めて居る者のみであるといふことを痛歎して居られるのである。

此の大切な場合に於て、如何にしたならば百年の大計を立て得られやうかといふ

正義の基礎としての慈悲

ことを御考慮になつて、佛教の興隆といふことより外はないといふ決心を御固めになつたのである。此の場合に於て最も肝要なのは各自が其の私心を去るといふことである。私心とは卽ち自己中心の思想である。卽ち煩惱である。煩惱を制し得るならば、佛性が之に伴つて發揮されるのである。佛性が發揮さるゝに隨つて、一身の利害得失を度外視して、世のため人のために力を盡すことを深き悅びとするといふ心になるわけである。斯ういふ人が多くなれば國が根本から建て直る筈である。太子は此處に着眼せられて、大乘佛教の興隆に全力を打込まれることになつたのである。されば憲法の第二條には佛教を盛んにすることの必要が說かれてあつて、其の理由として、

人尤だ惡きは鮮し、能く教ふれば之に從ふ。其れ三寶に歸せずんば、何を以てか枉れるを直うせん。

とある。是れは大乘佛教を學んで慈悲の力を養ふことが、卽ち正義を全うする所

以であることを示されたものである。正義を全うするのには是非とも各自の私心を去らなければならぬが、私心とは卽ち煩惱である。煩惱を去るといふことは甚だ困難である、之に就て觀普賢經にはまことに適切なことが說いてある。卽ち、

衆罪は霜露の如し、慧日能く消除す。

といふのである。秋の末から冬になると木の葉や草の葉に露や霜が置くのであるが、此の露や霜を一々拂ひ去らうとしても容易に出來ることではない。併し空に日が出て空氣が暖かになると露も霜も皆無くなつてしまふのである。吾等も心の中に煩惱が多くあるから種々の罪を作るので、之を一々取り除かうとしても容易に出來ることではない。併し大乘の敎へを學んで慈悲の行ひの貴いことが分り、所謂佛性が其の光りを發して來れば、煩惱は次第次第に除かれて、罪を作ることもなくなつて行くのである。聖德太子が此處に着眼せらたのである。

太子は二十一歲から四十九歲まで、前後二十九年間攝政として國家の爲に力を御

盡しになり、殊に佛敎を興隆することに依つて國民の精神的更生を謀られたのであるがその實績は美事に擧つたのである。僅かに二十九年間であるが、日本は全く生れ變つて力の充實した國となり、國難は克服せられたのである。それは國民が佛敎の信仰によつて、各自の私心を去り、協力一致の實を擧ぐることが出來たからである。憲法の第十五條には、

私に背き公に向ふは是れ臣の道なり。

とあるが、此の事が佛敎の弘通によつて立派に實現されて來たのである。新羅と任那とが聯合して使を送り、

今より以後相攻むること有らず、且つ船の柂を乾かさずして歲每に必ず朝せん。

といふ上表をしたのも、吾が國の國力が充實して彼等を畏れしめたからである。又隋の國から來た國書に對して、太子が自ら筆を執つて返書を認められて、

東の天皇敬ひて西の皇帝に白す。

といふ對等の語を用ひられるのも、吾が國が彼より壓迫されぬだけの實力を具ふるやうになつたといふことを自覺されたからである。此より以後隋に續いて唐が起つても、吾が國は何等の壓迫をも受けなかつた。

聖德太子が佛教の興隆に殆んど全力を傾注せられたのは、日本國民の精神的更生を目的とせられたもので、是れは立派に成功したのである。正義の國たる日本が飽くまで正義を貫いて行く爲には、いつも國民の協力一致を必要とするのであるが、協力一致は各自の煩惱を除くことに依つて初めて出來るのである。譬へば生れつき體質の良い人が常に榮養を攝ることを怠らなければ益々健康になつて如何なる困難を冒して行くことが出來るであらう。上に尊嚴無比なる皇室を戴き、非常に優れた國民性を有する日本國民が、佛教といふ最も優れたる教へによつて其の修養を積むならば、將來東洋諸國の國民を指導して、世界の平和に貢獻するといふ大任をも確

かに全うして行けるに違ひない。傳教大師が『大日本』といふ語を用ひ初められてから、一千餘年を經て、世界をして大日本の眞價を認めさせる時が必ず遠からずして到來することであらう。

今吾等は正義の爲に戰つて居るのであるが、支那國民が覺醒して、正義の前に跪き、改めて吾が國の指導と援護とを求めて來た時には、吾等は彼等の過去に於ける一切の罪を赦し、彼等の指導者となり援護者となつて、共に心を一にし力を協せ、東洋の平和を確立し、進んで世界の平和を維持することに力を盡さなければならぬのである。併し世界各國の關係は非常に複雜であるから、吾等の前途にはなほ多くの困難が横はつて居ることを覺悟しなければならぬ。

北條時宗の修養

文永五年の三月に北條時宗は十八歳にして執權となつたが、此の年の二月に蒙古から降伏を勸むる所の國書が到來して居たので、時宗は直ちに此の國難に對する全責任を負はなければならぬことになつた。而も時宗は如何なる壓迫にも堪へて正義を全うする外はない、斷じて國

辱を招いてはならぬといふ決心を固めて、開戰の準備に全力を注いだ、此より種々の曲折があつて、蒙古が大擧して來寇したのは弘安四年、卽ち時宗の三十一歳の時であつた。此の十五ヶ年間彼は全く一身を犧牲にして國事に當つたが其間に一日と雖も佛を禮拜する事と、經を讀誦する事と、坐禪をする事を怠らなかつた。

時宗は考へた。此の國難に打克つのには國民が協力一致しなければならぬが、自分は其の協力一致の中心とならなければならぬ。此處で自分の心に少しでも動搖があつては濟まぬ。自分は信心の力を賴まう。身を以て信心の力の何何に偉大なるかを試みよう。斯う考へて彼は十五年間の信心を續けたのであるが、愈々弘安四年の五月に至り、蒙古の大軍が迫つて來るといふ報告が鎌倉に到達した時に、時宗は其の師と仰いで居た祖元といふ高僧の前へ出て、此の際に於て唯だ一言の敎へを受けて、最後の決心を固めたいと願つた。之に對して祖元は唯だ一語を與へた。それは莫妄想。（妄想することなかれ）

といふのであつた。一切を思ひ捨つべきのみである。名利の念を去り、功を立て世を驚かさうとか、家名を揚げやうかといふことを一切思はず、唯だ自己の力の限りを盡さうといふことのみを念ずべきであるといふのである。此の一語を聽いて時宗は拜謝して退いた。此の莫妄想の一語は時宗の心を支配すると共に、日本軍全體を支配した。之に依つて日本の大勝利となつた。尤も此の年の閏七月に至り大風雨が起つて敵艦は大破したのであるが、それ迄三ヶ月以上も日本軍は健鬪して、敵兵を一人も上陸せしめなかつたから、斯ういふ結果を見ることが出來たのである。此の事を六百年のむかしの事と思つてはならぬ。吾等は吾等の信心を勵むことに依つて一切の妄想を除き、協力一致して正義の國日本を護り、世界の平和に貢獻せんが爲に努力すべきである。

心の建て直し（完）

不許複製

昭和十三年九月十五日印刷
昭和十三年九月二十日發行

心の建て直し

（奥付）

定價壹圓卅錢

著者　小林一郎

發行者　東京市京橋區銀座西一丁目三番地　增田義彦

印刷者　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　根本力三

發行所　東京市京橋區銀座西一丁目三番地　株式會社實業之日本社　振替東京參貳六番　電話京橋（五六）五一二一番

大日本印刷株式會社印刷

修養團主幹

蓮沼門三氏著

大願への歩み

八版　壹圓卅錢　送料拾貳錢

著者は、財團法人修養團の主幹として、教化運動に專念してゐる人で、その目的とする所は、天地の公道に則りて明朗な社會を造りだすにある。この主眼が本書には如實に示されてゐる。全文、平易、一讀强い感銘を吾人に與へるものである。

感銘錄　明魂

十三版　壹圓貳拾錢　送料拾貳錢

一小學教員から起つて卅餘年、病軀に鞭うちながら全國津々浦々に明魂顯現の聖戰を續け、遂に全國百萬の團員を結合して、神國日本を完成せんとする蓮沼先生の熱情は、凝つて本書となつたもの。心に惱みある者、生活に疲れし者、感奮更生の靈火こゝに燃え、直ちに魂に響く名著。

日本産業社長

鮎川義介氏著

改訂普及版　物の見方考へ方

百二十頁　定價五拾錢
九版　送料九錢

本書は著者鮎川氏が、常日頃抱いてゐる生活信念と事業哲學とを、興味ある過去の經歷を中心に物語り、併せて將來日本の産業界の行くべき道を、通俗平易に、しかも彫心鏤骨、一言一句の末に至る迄全身の熱意を打ちこんで綴られた名著である。何人も事業繁榮の祕法として、又立身出世の捷徑として本書を熟讀されよ。特に青少年のために、刊行せる普及版は好評嘖々。

三井前重役
米山梅吉氏著

常識關門

一サラリーマンから出發し三井重役まで榮進した著者の處世談修養談常識涵養談等滿載。（價壹圓・送料九錢）

第五高敎授
八波則吉氏著

道歌清談

古來から有名な處世修養の和歌四十五首を中心に新時代の新處世法を述べた良書である。（壹圓廿錢・送料拾貳錢）

農・法學博士
新渡戸稻造氏著

人生讀本

日本が生める國際的大人格者たる博士が實生活の諸問題を批判し解決した修養の名著。（壹圓五拾錢・送料拾五錢）

農・法學博士
新渡戸稻造氏著　縮刷

世渡りの道

高遠の理想を抱き、品性を潔くし、俗にありて俗に溺れざる眞の世渡りの道を說く。（壹圓五拾錢・送料拾貳錢）

中心社主幹
常岡一郎氏著

中心の示す道

この世には病になき、不幸に苦しむ人が多い。既に不幸に落ちた人を救ふ學問は進んだ。病院は至る所に出來た。それで居て、病人は日本から減らない。それは何故か？中心社主幹常岡氏は、その有する中心歸一の思想を以てこれを解決せんとする。

十五版　定價壹圓　送料拾貳錢

「禪の生活」主幹
山田靈林氏著

禪學入門の書

本書は、斯界の第一人者として令名高き著者が、時局を深く認識し「禪學で純化されゆく生活記錄」「禪學を實際に體得する法」及び「七日間の禪學修業體驗記」の三篇に亘つて講述した宗教的良書である。本書を繙き禪學の妙味を體得せられよ。

三版　壹圓卅錢　送料拾貳錢

陸軍少將
大場彌平氏著

名將兵談

我が國に於ける兵法の大權威たる著者が、東西古今の名合戰を、縱橫無盡に批判し、以て戰爭戰略の眞の意義と、名將の眞の姿を如實に描いたのが本書である。非常時局下國民の必讀良書。

重版　壹圓卅錢　送料拾貳錢

中田千畝氏著

大將の少年時代

滿天下の少年少女、否全國民のあこがれの的である陸海軍大將廿數士の少年時代の、興味津々たる逸話を、著者獨特の達意平俗の名文にて綴つたもの。彼等將星は幼き日、如何なる事を夢みたか。

重版　壹圓廿錢　送料拾貳錢

菊池寛氏著

少年日本武將合戰物語

非常時の今日、茲に大文豪菊池寛先生が、世の青少年少女諸君に、古今の名合戰を通俗讀物物風に解說し、以て國史を中心に名將の眞精神を知らしめんとして綴られたものが本書であります。

重版　壹圓卅錢　送料拾貳錢

實業之日本社々長

増田義一氏著

今後の進み方

五版　壹圓參拾錢　送料拾五錢

青年指導の權威者として令名高き著者が、時局多事多端、非常の折柄、青少年は今後、如何なる心構へにて、如何に進むべきかに就き、滿腔の熱意をこめて懇説した名著である。學窓にあるものは勿論實社會にある青年男女は、新修養訓、新處世訓、新成功訓として熟讀されよ。

- 青年と修養　壹圓五拾錢　送料拾五錢
- 群を拔く道　定價壹圓　送料拾貳錢
- 立身の基礎　貳圓廿錢　送料拾五錢
- 青年出世訓　定價貳圓　送料拾五錢
- 運命の打開　定價壹圓　送料拾五錢
- 處世新道　壹圓五拾錢　送料拾五錢
- 思想善導の基礎　壹圓五拾錢　送料拾貳錢
- 大國民の根柢　壹圓八拾錢　送料拾五錢
- 婦人と修養　壹圓五拾錢　送料拾貳錢
- 英傑の少年時代　定價壹圓　送料拾貳錢
- 現代名士逸話隨筆　定價壹圓　送料拾貳錢
- 現代名士奇聞錄茶前茶後　定價壹圓　送料九錢

實業之日本社發行

根津嘉一郎氏著

世渡り體驗談

新刊　壹圓卅錢　送料拾貳錢

大藏大臣 商工大臣　池田成彬氏曰く――世に理論を語るの士は多いが、體驗を語り得るの士は少い。この意味に於て根津君の體驗談ならば、大いに興味を持つ一人である。現に本書の修養篇、處世篇、健康篇、結婚篇等は苦勞人の同君がさながら嚙んで含める樣に、親切叮嚀に後進青年の手を取つて導くが如き眞情、切々と紙面にあふれ、讀むものをして思はずほろりとせしめるものがある。

東亞同文書院教授　馬場鍬太郎氏著

中支の資源と貿易

重版　貳圓五拾錢　送料拾八錢

東亞同文書院教授　馬場鍬太郎氏著

北支八省の資源

四版　定價貳圓　送料拾五錢

松岡洋右氏序　原口統太郎氏著

支那人に接する心得

五版　壹圓卅錢　送料拾貳錢

日本賈達社長　中野友禮氏著

これからの事業これからの經營

七十版　定價壹圓　送料拾貳錢

實業之日本社發行

好評の重版修養書

本間俊平氏著 **人生の大原動力** 四版 定價壹圓 送料拾貳錢

本間俊平氏著 **心靈の戰場から** 廿二版 定價壹圓 送料九錢

大谷光瑞師著 **光瑞縱横談** 六版 壹圓卅錢 送料拾貳錢

農・法學博士 新渡戸稻造氏著 **偉人群像** 十三版 壹圓五拾錢 送料拾貳錢

賀川豐彦氏著 **處世讀本** 基督教的處世道 重版 壹圓五拾錢 送料拾五錢

文學博士 椎尾辨匡氏著 **本當に生きる道** 三版 壹圓參拾錢 送料拾貳錢

總持寺貫首 伊藤道海師著 **禪的處世法** 三版 壹圓廿錢 送料拾貳錢

清水谷恭順氏著 **新釋觀音經講話** 八版 壹圓五拾錢 送料拾貳錢

實業之日本社發行

一日一言

農・法學博士 新渡戸稻造氏著

—壹圓廿錢・送料拾貳錢—

一年三百六十五日に宛はめ、修養に關する博士の感想を記し、尙東西古今の金字を挾む。

新渡戸博士讀本

東京帝大教授 矢內原忠雄編

—壹圓卅錢・送料拾五錢—

本書は博士の高弟たる著者が、博士の全著作物を渉獵吟味して、輯錄したもの。

偉人の少年時代

全七卷

七歲の卷・八歲の卷・九歲の卷
十歲の卷・十一歲の卷
十二歲の卷・十三歲の卷

東京高等師範學校附屬小學校主事 佐々木秀一先生 監修

東京文理科大學教授 松本彥次郎先生

本叢書は古今東西の偉人の少年時代の美談、逸話を年齡別に配列し、同年配の讀者諸君の學力に應じ、用語、文章等に充分の注意を拂つて編纂したもので、絕好の家庭新讀物である。

定價各冊壹圓
送料各冊拾貳錢
各冊函入美本

實業之日本社發行

1530-P4

醫學博士 式場隆三郎氏著 **四十からの無病生活法** 入澤達吉博士絶讃の中老及び老年者の必讀書 (壹圓五拾錢 送料十五錢)

西式健康法創始者 西勝造氏著 **西式觸手療法と保健治療法** 西式の六大法則と百四十余病の觸手療法公開 (壹圓八拾錢 送料十八錢)

西式健康法創始者 西勝造氏著 **西式斷食療法** 心身改造と萬病根治の大秘法として本法懇説 (壹圓貳拾錢 送料十二錢)

滿鐵保養院長 遠藤繁清博士著 **改訂增補 療養新道** 最新療法の立場より、特に精神療法をも講述 (壹圓八拾錢 送料十五錢)

醫學博士 正木不如丘氏著 **療養三百六十五日** 療養者は勿論一般家庭人の通俗衞生の良書。 (壹圓五拾錢 送料十五錢)

醫學博士 佐多芳久氏著 **腦溢血の豫防と治療法** 中氣中風の血統者は勿論、高血壓の人は繙け (壹圓五拾錢 送料十二錢)

醫學博士 原志免太郎氏著 **萬病に效くお灸療法** お灸の研究で學位を得た著者が據え方を説く (定價壹圓 送料九錢)

內科・神經科 樫田十次郎氏著 **新しい腦の衞生** 腦に關する一切の疾病とその治療法を懇説す (壹圓五拾錢 送料十五錢)

醫學博士 西川義方氏著 **溫泉讀本** 湯治の仕方を醫學者の立場より指導した良書 (壹圓五拾錢 送料十五錢)

實業之日本社發行

Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

inches 1 2 3 4 5 6 7 8

cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black